
私の猫はクリスチャン

暁 ?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の猫はクリスチャン

【Zコード】

Z94800

【作者名】

暁 ?

【あらすじ】

中学三年生の女の子未来は、両親が無く祖父・祖母、そして弟と暮らしている。拾ってきたクロという名の猫がいる。

そのクロに見込まれて?、未来は猫に変身できるようになる。そこで体験する猫や犬との会話、そして学校での出来事、友達との交流などから、成長していく姿をおもしろおかしくたどってみる。

簡単な紹介

私の猫はクリスチャン

* 簡単な紹介

あたしの名前は、（みく）。未来と書いて（みく）と読むんだ。

進藤未来。

十四才！中学二年生になつたばかりなんだ。

弟が一人いる。名前は誠。

親父は、死んだ。

あたしが、小五の時、肝臓ガンで死んだんだ。

おふくろは、親父が死ぬ前に、離婚して出て行つたきり会つてない。
親父の親父、つまりおじいちゃん。それから、おばあちゃんと一緒に
に住んでる。

おじいちゃんは、六十過ぎてるけど、本屋さんをやつてるんだよ。
従業員が、七人いる。アルバイトも何人か使つてるし、結構、儲か
つてるんじゃないかな。まあ、あたしは、あんまり興味ないけどね。
そうそう、おじいちゃんねえ、髪の毛を伸ばして、ポニー テールに
してるんだよ。

ポニーだよ。ポニー。銀白髪のポニー。鼻の下には髪。

それがね、似合つてるの。

背は、あまり大きくないんだけど、均整のとれた肉体で、背筋をぴ
んっと張つてね。

格好いい、爺さんなんだ。

おばあちゃんは、家のお仕事。ハウスワイフってやつだ。

時間にひるさい以外は、とても優しい婆さんだね。

料理は、上手いよ。あたしも、料理は好きだ。

将来は、料理家になろうかなあ、なんて思つてたりして、へへへつ。
これが、あたしの家族だ。

ああ、そうそう、もう一人・・・一人といふか、一匹忘れてた。

(クロ)といふ名前の、猫がいる。

名前の通り真っ黒け。右の前足の手の所だけが白い。

今年の初詣に行つた時、帰りがけに箱に入れられて、捨てられたのを拾ってきたんだ。

お爺とお婆は、黒くて気持ち悪い、と言つたけど、何とか口説いて飼うこととした。

そういう、あたしね、おじいちゃんとおばあちゃんの」と、(お爺・お婆)って呼んでるんだ。

別に、生意気な気持ちで、呼んでるんじゃないよ。

親しみを込めて、呼んでるんだから、誤解しないでね。

住んでる所?

知つてるかな、石岡市つていう、茨城県の、丁度真ん中ぐらいいの所で、田舎の小さな市。

あたし、歴史はあまり好きじゃないけど、昔は、常陸の国府があつたらしくて、古い町みたい。国分寺とか、国分尼寺とかあつたりして、国府城跡といふ史跡もあるよ。

まあ、今のあたしの生活には、関係ないみたいだけど。

あしたは、また学校だ。

勉強よりも、陸上の部活をやりにこつてゐるようなものだけど、嫌いじゃないよ、学校は。

陸上の短距離には、ちょっと自信がある。

弟も駆けっこには速いんだよ。小学校でね・・・ああ、弟はいま小五。五十メートル走の記録作つたつて自慢してた。七秒三だつて、速いでしょ。

いつも、クロを追いかけ回して、遊んでるからかな。
だからと言つて、勉強ができないわけじゃない。

あまり家ではやらないけど、いつも、テストではいい点数をとつてるんだ。

なぜか、判らないけど、頭はいいんだねきっと。

自慢で言つてゐるわけじゃなくつて。自分でも不思議に思つたことがあ
る。

勘も鋭いんだ。だからテストはほとんど出勘。それがまた、よく当
たるんだ。

・・・・・ そういえば、クロ何処いつたんだろう?
あたしといつも一緒に寝るのにな・・・
まつ、いいか。今日は一人で寝るか。

「みぐ! 起きなさい! 誠!」

(んーむつ)

もう、朝か? わつき、寝たばかりなのに。

「みぐ! まことつ!」

「わかつた!」

お婆は、少しつむれ。

「おはよつ、みく姉・・・」

「あんつ。んつ おはよつ」

弟は、まだ寝ぼけ眼だ。そつこつあたしも?かな。

弟は、あたしの隣の部屋で寝ていて、起き出すと、まずあたしの所

へやつてくるんだ。

家はね、一階建ての家で、庭もちょっと大きいくのあつてね、おば
あが、花や木の手入れをしてる。

「はやくしなさい!」

お婆だ。・・・ うるわっこでしょ。

トントントンシ!-

「階段は、静かに下りなさい。」

「はあ~い。」

誠が舌を出して、あたしを見た。

あたしは、誠に舌を出し返し、首をすくめて席に着く。

テーブルの上に、オムレツ、キユウリと玉葱だけのサラダ、コーン
スープが置かれている。

お婆は、（朝は洋風がいい）とか気取つて言つてるけど、あたしは、どつちかつて言つと、生卵かけご飯か納豆ご飯がいい。

でも、お婆の作るのは、美味しいから許してんんだ。んつ。

「顔、洗つた？」

パンをオープントースターに入れながら、お婆が言つた

「洗つたよ。」

「口、ゆすいだ？」

「うんつ」

「早く、食べなさい。遅刻するよ。」

「いつただきま～す。」

いつも変わらない、朝の会話だ。

弟が、冷蔵庫から100%グレープフルーツジュースを取り出して、コップに注ぎ、一気に飲み干した。

「あ～つ～うめえ。」

これも、毎朝同じだ。弟は100%グレープフルーツジュースがないと、機嫌が悪い。

100%でなければダメだ。

あたしも時々飲むけど、確かに、身体がすつきりとするような気がする。

気がするだけだけど、弟に言わせると（元気の源）らしい。

お爺が、毎朝ヤクルト飲むのと、大して変わらないかも。

そのお爺は、きょうも、ヤクルトを飲んで出かけたらしい。

本屋の仕事は、結構忙しい。文房具も扱ってるから、朝の通学前に

は、店を開けているんだ。休みは、第一・三・五の日曜日。

「おいしいね。」

誠が、トーストにオムレツを乗せて口に運んでいる。

おばあは、いろんな料理を考えて作る。

きょうのオムレツは、とろけるチーズと、カルビーポテトチップスのつす塩味が、ぐだいて入っている。

ケチャップを、少しかけて食べると、美味しいからやつてみると

いよ。

かつぱえびせんや、のり塩味もいいけど、あたしは、うす塩味。
ああ、それからね。刻んだ、ネギを混ぜて作ったオムレツに、しょ
う油を、ちょっと垂らした大根おろしで、食べるのも美味しい。
キュウリと玉葱のサラダは、塩もみしただけで、好みのもので味付
けして食べる。

あたしは、しょう油マヨわねび。

誠は、紫蘇ドレ、お婆は、かつおぶしとしょう油。

「ひがひやひきまー！」

「いつてきま～す。」

「いつてらっしゃい。気をつけ！』

誠と一緒に出かけるけど、途中で、反対方向になるんだ。

あたしは、学校まで歩いて三十分ぐらいかな。誠は、もっと近い。

「みく姉。」

「なに？」

「きのう、クロ帰つてこなかつたね。」

そうだ、忘れてた。朝も居なかつた。

「あつ、そうだね。帰つてこなかつたのか。」

「だいじょぶかな？」

「・・だいじょぶよ。心配なし。」

「まだ、一ヶ用位だし・・・家が分かんなくなつちやたりして・・・

。

「そんなことねえだろう。」

と、元気に言つてみたけど、ちょっと心配・

「じゃあね。みく姉。」

「おつ、がんばれよ。」

誠は、学校へ向かつた。

あたしは、ここで、友達の涼子と雅美と、待ち合ひませ。

「おはよー！」

「おはよー！」

一人がやつてきた。

「おはよっ。」

「みく！ あんた宿題やつた？」

雅美が訊いてきた。

「えつ？ 何だつけ宿題？」

「理科の宿題あつたじやん。」

「ああ、あれかあ。んつ、やつたよ。」

「あとで見せてよ。理科は、五時間田だしい。」

「ああ いいよ。・・・涼子は？」

「あたしい？ 一応やつたけど・・・」

「一応ね。」

雅美が言つた。

ふたりは、あまり勉強が好きじやない。あたしも好きな方ではないけど、結構おもしろいし、それなりに楽しんでるんだ。

涼子が、雅美の顔を見ていつた。

「みくは、いいよね。頭がいいから。」

雅美が、同調する。

「うんつ。・・なんでもみくは、頭いいんだ？」

「別に、よかあないよ。」

「でも、なんでも出来るよね。」

「なんでかなあ」

ふたりの会話は、そんなことばつかしだ。話題を変えよう。

「ねえねえ、そんなことよりも、昨日、クロが帰つてこなかつたんだ。」

「えつ？ クロつて、あの真つ黒な猫？」

「気持ち悪いよね、あの猫。真つ黒で。」

「かわいいとこ、あんだよ。あれでも。」

「帰つてこなかつたの、初めて？」

「んつ。」

「車に轢かれちゃつたとか・・・」

雅美が、縁起でもないことを言つ。

「えつ？ それはないよ。そんな」と言わないでよう。」

「だつて、時々、轢かれた猫がいるじゃん。それに、まだ小さいし・

・・・」

「そうだけど・・あれでもクロは、あたしの可愛いペットなんだから。縁起の悪いこと言わないでよ。」

確かに、学校の行き帰りに、猫や犬が車に轢かれて、ペちゃんこになつていることがある。

あの猫や犬の飼い主は、何処にいるんだろうって、いつも考えてたんだよね。

だつてさ、可愛がつていたペットを、三日も四日も、ペちゃんこのままにしておけるか？

あたしだつたら、絶対対つに・おけない！！

「あたしんちには、犬がいるけど あんまり好きじゃないな、動物つて。」

と涼子が言つた。

「涼子は、臆病だもんね。」
と雅美。

「臆病といふか、なんか怖いのよね。何考てるか、わかんないんだもん。」

「それつて、臆病なの。」

雅美が笑つて、決めつけるように言つた。

「そういうえば、涼子。あんたつて陸上の時、スタートでいつもドキドキしてるよね。」

あたしは、スタートの時、緊張してゐる涼子の姿を思い出して言つた。三人とも陸上部なんだ。雅美は中距離。あたしと涼子は、短距離。

「・・・ そつなんだよね。それで、スタートが遅れたりして・・・」「はははっ。緊張のしすぎだよ。」

雅美は、何事も、あまり考えずに、なんでもやつてみるほうなんだけど、涼子は、どつちかつてゆうと、考えすぎの方かな。ナイーブ

つてゆうか、センシティブつてゆうか。

そのあとは、いつもと同じ登校の風景。

あしたになつたら、忘れてしまいそうな、くだらない話をして、笑いながら学校へ行つたんだけど、あたしの頭の中から、なぜか、クロのことが離れなかつたの。

心配といつより、気にかかると言つた方がいいかな。

校門の脇にある桜の木が満開になり、毛虫が、もぞもぞと上つていくのが、目にとまつた。

きょうは、月曜日で全校朝礼があつた。

校長が、（あすなろ）という木の話をしたんだ。

あすなろは、檜にならうとしたんだつてよ。

あすは、ひのきにならうーあすは、ひのきにならうーあすはならう

！ あすなろつ！

と、一所懸命頑張つたんだつて。

だから、皆さんも今日は駄目でも、明日も続けて頑張るよつにーと、締めくくつた。

いい話をした後は、とても気持ちがいい。といつ顔をして、校長は満足そだつた。

（馬づ鹿みたい！駄洒落だよ。檜は檜。あすなろは、あすなろだろうに。無理をしないで、自分の個性を出しなさい。あすなろ君。）
と、あたしは思った。

が、前に並んでいる涼子は、感心して聞いている。先生の言つことには、疑問を持たないのだ。

隣にいる隆太も、うなずいて拳を振り、目を輝かせてゐる。

ああつ。一人はあすなろに、洗脳されてる。

隆太は、学級委員長なんだけど、先生のといつことは、何でも正しいと思つてる、学校側にとつては、とっても優秀な生徒なんだ。
ちなみに、あたしは副委員長。

知つてる？ 雑用係みたいなものよ、副委員長つて。職員室と教室を行つたり来たりして、メッセンジャー・ガールではないのだ、あたしは。

涼子が保健係で、雅美は生活委員。

笑っちゃうよね、すぐ、パニックになる涼子が保健係で、身だしなみにも無頓着な、男勝りの雅美が、生活委員だつて。
まあ、そうゆうあたしも、適当に雑用係をこなしてるけどね。

ああ、退屈な歴史の時間が終わつた。

あたしね、歴史の話は好きなんだけど、年号を覚えるのが苦手なの。
何があつたかの、順番は判るんだけど、年号がねえ。
それに先生が教えるのは、誰が、何を、何年にやつて、何が出来た。
とかいう話であつて、どうして？とか、なぜ？とか、どんな人物で、
どんな家族でなんて、あまり話してくれないんだもん。

正倉院を造つたのは誰？

あたしは断言する。腕のいい大工さんだ。

明智光秀が、織田信長を殺したのはなぜ？

あたしは思つ。（あんた、やっちゃいなよ。）と女房にけしかけられたのだ。

事実は、わからないでしょ。その時に生きていた人、今いないんだもん。

文献と推察と想像でしか、歴史は存在しないのだ。
年号と人物だけなんて、あきちゃう。

次は、数学だ。

（クロ、どうしたかな？）

「進藤！この方程式を解いて。」

先生の声が耳に入った。

あつ、いま授業中だつけ。

方程式か。しようがねえ、やつてやるか。

黒板に向かつて行き、答えを書いて戻つてきたら、

「答えだけじゃなくて、式も書いて。」

だつて。

上等じゃねえか、やつてやるよ。

(それよりも、あたしはいま、クロの「」どが気になつてんだからね。)と言つてやつても、無駄なことは判つてゐる。

$$2x + 10y = 54$$

$$Y = 2 \cdot 5x$$

$$2x + 10(2 \cdot 5x) = 54$$

$$27x = 54$$

$$x = 2$$

$$y = 5$$

「よしつ！ よく出来た。」

(よく出来ただあ？ 小学校の復習でしょ。 受験勉強のための。 · · ·
· それよりクロだよ。 んつ当に！ · · ·)

クロのことを考え続けて、数学の時間が終わった。

昼休みだ。お弁当を広げた。

相変わらず、お婆の作ったお弁当はきれいだ。

小さな、俵方のおにぎりが4個。

紫蘇を混ぜたのと、高菜の漬け物を混ぜたのと、鮭を混ぜたのと、ゴマをかけたのが、入つてゐる。

おかげは、レタスを敷いて、その上に豚の角煮がふたつのつている。それから、ほうれん草を玉子で巻いたものと、ひじきの煮物だ。きゅうりのぬか漬けと、梅干しも入つてゐる。梅干しを入れておくと、ご飯が悪くならないんだつて、お婆が言つてた。本当かどうか判らないけどね。

涼子と雅美は、クロッケパンと、牛乳を買つてきた。

一緒に食べたけど、今日は、何故か美味しく感じなかつた。
きっと、クロのことがあつたからだね。

何処で何をしてるのかなあ、とか、何を考えているんだろう、とか、

気になっちゃって。

「みく！宿題見せて。」

「おうひー

雅美が、あたしの理科のノートを持って行った。
きょうの理科の授業は、動植物の系統だ。あたし、理科の授業好き。
だって、いつもあたしの頭の中に、疑問を残してくれるんだもの。
先生は、決まったことのよう、「教えてくれるんだけど、不思議が
いっぱい。

小学校の時、

上空の水蒸気が、空気中の眼に見えない塵にまとわりついて、雨となつて降つてくる。

気温が下がれば雪になる。
と、先生が教えてくれた。

不思議だ。中学生になつたいまでも。

あたしが、

(眼に見えない塵つて何だ?)

(雪になる過程は?)

(霰は？ヒヨウは？)

(気圧との関係は？)

(地表との関係は？)

と、しつこく質問したら、あきらかに嫌な顔をして、適当に説明して

(時間がないから次に進む。) ときたもんだ。

(だって、あたし、雨になる瞬間見てないもん。霰だつてヒヨウだつて、出来るところ見てないもん。)

と、言いかけて、止めたことがある。

「種・属・科・目・綱・門 そして、それぞれに亜がある。人間は、
動物門、哺乳綱、哺乳目、ヒト科、ヒト属、ヒトだ。」

先生が、(私は知っているのだ。) と自信を持つて、不敵な笑いを
含んで説明している。

(そうか？どうして、自信を持つて言えるのだ？)

(それでいいのか？)

(誰が、何の権限があつて、決めたんだ？)

あたしの頭の中に、疑問さんがアポイントなしにやつてきた。

あたしは、優しく招き入れて、先生の声を遠くに聞きながら、疑問さんと話することにした。

(黒人や白人の違いは何だろうね？)

(ん～むつ？亜種か？)

(何で、亜科じゃないんだ？ 亜属でもいいだろ。)

(うんつ。白人だつて北欧系・北美系・その他諸々、黒人に至つては、かなり異なった人種がいるよね。黄色人種だつて・・・なんでだ？)

(先生に、質問してみるか？)

(・・・やめとくよ。だつて、気候がどうの風土がどうの、って言うに決まってるもん。)

(そうだな。ロシア系の太つた白人と、墨汁より黒い南アフリカの黒人と、ホッテントットが、同じヒトと、言つに決まってるよな。(違うと思つただけどね。どれが優秀とか、未来的とかゆうんじやなくて・・・)

(牛や馬も、そだらう？)

(そり、なんだよね。蹄が一つだから奇蹄目で、一つだつたら偶蹄目。蹄が二十一個あつても奇蹄目だよ。だつたらさあ、眼が一つだから、一眼目とか、鼻が一つだから、一鼻属にしたら、一つに纏まつちゃうだらうよね。もう少し細かく別けて、一足科・四足科・六足科・八足科・百足科つてのもあるわよね。無眼目・百足科・属ぞくつ・ムカデなんてね。)

(何だ？属ぞくつって。)

(だつて、気持ち悪いじゃん。だから、ぞくぞくつて。)

(なるほど。水目・陸目・空目つてのもあるな。)

(おもしろいね。毛無し属に、毛有り属。)

「進藤！何をニヤニヤしてるんだ？爬虫類と、ほ乳類の心臓の違い

をいつてみる。」

疑問さんとの楽しい会話を、先生に邪魔されてしまった。

「一心房一心室、一心房一心室。」

「よしひー。」

（よしひー。だって。同じ、ヒト科ヒトヒトでしょ。何様のつもり？）

（はははっ、むきになるなよ。）

よかつた、まだ疑問さんは帰つてなかつた。

（一心房一心室の方が、単純でいいんじゃないのか？）

（そうだよね、病氣も単純で少ないと思うわ。）

（生きていく上では、魚の方が、ヒトより進んでいるかも？）

（そうよね、心臓なんてただのポンプだもん。食べるものにしたつて、口に入るものは何でも食べるし、・・・魚つて、好き嫌い・・・あるのかなあ？）

（俺は、小エビの方がいいな。プランクトンは、どつも、食つた気がしねえ。なんてな。）

（朝、昆布食べたから、夜は、ウミウチワにしようかな。）

（いや、今が旬のウミブドウにしよう。）

（でも、みんな塩味で身体に悪くないかしら？）

ピリリーンボーンッ

「時間です。きょうは、これまで。」

授業が終わつて、疑問さんも帰つた。

六時間目は体育で、その後、着替えて部活のために部室へ行つた。

一年生が、ぞろぞろとやつてくる。

今年の新入部員は三十八名。一年生が十九名で、私達三年生が、二十三名いる。

新入部員が、何人残るか判らないけど、短距離に、結構凄い男子と女子が一人ずつ入つてきていた。

雅美も、中距離に有力な新入生がいると言つて、毎日、じごくのを楽しんでいる。

あたしは、じーこで嫌われた上に、あたしより速くなつちやつたら嫌だから、じーきとゆう名の指導は、しないことにした。

スタートの練習をしてみると、クロと回りつな格好をしてゐることに気づいた、

(きょうは、帰つてゐるかな)

と思つたら、やつぱり、家に帰ると誠と遊んでいた。

「帰つてゐるじやん。」

「ああ、帰つてたよ。心配で早く帰つてしまつたら、縁側で田舎いなかみつしていた。」

「まさか、早退したんぢやないでしょ?」

「違うよ、クラブやらないで、帰つてきただけだよ。」

「ふうん。それならいいけど。」

あたしも、鞄を置いて、着替えて、手を洗つて、うがいをしてとう、長い道程をえてから、クロの所へ行つた。

それらのことをやらないと、お婆がうるさいんだよね。お婆は、いま買い物に行つてるんだけど、居なくとも、習慣になつてしまつてる。

「あまり、かまうなよ。」

「だつて、可愛いんだも。」

「可愛いくても、クロは、遊びたくないかもしれないだろ?」

「みく姉は判るのかよ···クロの、考えてることが?」

「···なんとなくね。」

「クロはこいよな、学校もないし、寝たい時に寝て、食べたい時に食べる。」

「ミヤー オ!」

「ほりね! そだつてさ。」

「違うよ。クロにまだ、クロのクロロウ(苦笑)があるつて言つたんだ。」

「まはま。猫がしゃれ言つのかよ?」

「ミヤー。」

「ほら、言つて言つたう。」

あたしも誠も、クロに癒されている。

飼うのに反対だった、お婆だつてね、クロの「」飯、一所懸命に、作つちやたりしてるんだよ。

お爺も、休みの時なんかね、膝に乗せて、クロが（「」「」「」「」「」）と喉を鳴らすのを聞いて（、「ふふむむつ」）なんていつしょに、鼻を鳴らしてるんだから。

お爺もお婆も、癒されてるのだよ。そこに、違いない。

あたしは、猫や犬は大好きだ。

何となくだけど、考えることが、判るような気がするから。総体的に、蛇と毛虫以外の、動物は好きだけど、ネコ科とイヌ科の気持ちは、判るような気がすると思っている。

鳥は、判らないな。

中でも、フランク「」なんてわ、他の奴のまねして、右へ行つたり、左へ行つたり。

自分つてものがないよ、自分つてものが。

でも、フクロウや鷺みたいな、猛禽類は判るな。自分がるもの。猫や犬と同じ、ほ乳類でも、キリンとらくだと、鹿は判らない。

キリンが、水を飲むときの格好、知つてる？

足を広げるんだよ。身体の割には細い、あの足を、お相撲さんの、股割みみたいに。

そいでもって、あの長い首を、前に倒すの。

自分の首の長さが、判らなかつたら、水たまりに、上手く首をもつてくことが、できないでしょ。大変だよね。

水ぐらい、簡単に飲める身体の作りに、すればいいのにね。らくだのこぶは、なぜ背中にあるの？

水が入つてるとか、脂の固まりとかいうけど。

だったら、無理して、背中に出さなくたつて、内臓器面にしておいても充分じゃん。ねつ。不格好だよ。

それに、やたらとよだれを出してるし、牛よりひどいよね。あの、

よだれ垂れ流し咀嚼。

あたしがやつたら、行儀が悪い…って、お婆に怒られたりやつよ。

鹿はさあ、おどおどしそうだよね。

物音や気配に敏感でや、せよろきよろしてさあ、走つて逃げるの。

出てくるなよ。臆病者！

「ふつミヤ～ゴ～！」

「何笑つてんだよ。クロ！」

「ニヤ・ニヤ・ニヤ～」

クロが仰向けになつて、お腹を出して、喜んでるみたいだ。

「」飯にしよう！手を洗いなさい！」「

お婆の声に、クロが、体勢を立て直して駆けだした。

あたしの家の、晩ご飯は、少し早いんだ。七時になつたら食べる。

お婆は、時間にひまさいからね、ずれがあつても、一分か二分。

その時間に、お爺が帰つてきて、一緒に晩ご飯を食べるの。

お爺は、食べた後、また本屋さんに戻つて、九時ぐらいに帰つてくる。

用事がないときは、お昼も、家で食べるんだよ。

仲がいいんだ、お爺とお婆。

クロの後を追いかけて、庭から家の中へ入つた。

カレーの匂いがだだよつてきて、らくだのよつによだれが・・・

ああ、カレーは香りだけで、あたしを、牛やらくだにしてしまう。

誠は、すでにテーブルの前に着席して、スプーンを持ち、臨戦態勢

に入つてゐる。

お爺も、白い口ひげを撫でて、つばを飲み込んで、胃袋へカレーの突入を容易ならしめるよつ、指示を出した。

あたしの家族は、カレーが大好き家族だ。

きょうのカレーは、何だらう？

田の前に運ばれてくるのが、楽しみだ。

お婆は、その、みんなの顔を見るのが楽しみで、運ぶのを手伝えとは言わない。

クロは、台所で、キャットフードを食べている。

おおっ！出できた出できた。あたしは、完全にらくだ状態。

きょうのカレーは、挽肉カレーだ。

豚挽肉と牛挽肉を、みじん切りにしたニンニクと生姜、それから多めの玉葱と一緒に、バターで炒め、完熟トマトとワインで煮込んでチーズを入れる。市販のルウだけど、お婆は、香辛料とお醤油とお砂糖を追加して入れる。お味噌もスプーン一杯、入れているという噂だ。とにかく、旨い！

野沢菜と、高菜の漬け物が、細かく刻まれて、テーブルの中央に置かれた。

「さあ、食べましょう。」

お婆は、みんなが、つばを飲み込んでるのを見て、満足したようだ。

「いただきます！」

言うより早く、誠が、野沢菜に手を伸ばした。

あたしも高菜に手を伸ばしたが、高菜の入った器が、すっと、お爺の手元に引き寄せられた。（やられたっ！）ひと指、遅かった。

あたしが、高菜に手を出すのを、心得ていて。お爺も、さるものひつかくものだ。

仕方がない、らくだになつたあたしは、口を半開きにして待つ以外に、手はない。

待つてゐる三秒ぐらいが、長い長い、拷問のようだ。

もし、あたしが、悪いことをして捕まつたら、カレーを田の前に出してください。きっと、知らないことまで、白状するだろ？

あたしの手元に廻された器から、高菜を、こんもりとカレーに乗せて、一口よだれの中に混ぜてあげた。

あああああ。この世のものとは思えない、心地よさー。

挽肉カレーには、高菜だ。誰がなんと言おうとも。

バターで炒めた、玉葱の甘さの中に、ニンニクと生姜の香りが漂い、挽肉を包む。

ときおり、チーズとトマトが訪れて、戯れる。

カレーの芳醇な香りと、舌と鼻腔を、ぐすぐるよに刺激する辛さ。そして、主役ともいえる、脇役の高菜が、しゃきゅしゃきゅと、音を立てて、漬け物独特の香りと、味を放出する。思わず、ぐだらな料理評論家になつてしまふ。ああっ、くそつー旨い。

見事な競演の、虜になつたあたしは、ひたすら、スプーンを口に運ぶ単純作業を、黙々と繰り返す。この規則正しい作業は、時給いくらになるだろ？

「おかわり！」

「儂もだ。」

誠とお爺の声が、遠くで聞こえる。

あたしも、一皿めを堪能して、長くて短い、幸福に満ちあふれた時間が、終わつた。

「やっぱ、野沢菜だね。」

「いや、高菜だよ。」

誠とお爺の、漬け物談義が始まつた。

挽肉カレーのあとは、いつも同じだ。

あたしとお爺は、高菜派。誠とお婆は、野沢菜派。

野沢菜も美味しいんだけど、漬け物の香りが強い高菜の方が、あたしは好きだな。

お婆は、いろんなカレーを作る。

別に習つたわけでもなさそうだけど、料理は、本当に上手い。

残つた挽肉カレーをね、スペゲッティにかけて、蕩けるチーズと、パン粉をかけてオーブンで焼くと、これまた美味しい。

茄子を入れた、茄子挽肉カレー。

カボチャを入れた、かぼちゃ挽肉カレー。

苦瓜を入れた、苦瓜挽肉カレー。

オムライスにかけて、オムライス挽肉カレー。

がんもどきと、はんぺんと、玉子と、蒟蒻にかけて、おでん挽肉カレー。

挽肉のカレーだけでも、かなりのレパートリーがある。

でも、一度、納豆と混ぜたときは、ちょっと失敗したかな。

一ヶ月に一回は、必ずカレーなんだけど、鶏を丸ごと入れて、スープ風にしてみたり、牛タンを使ったり、イカ墨で、真っ黒な海鮮カレーを作ったりする。

材料によって、辛口と中辛、甘口と混ぜたりしているみたい。

挽肉カレーは、辛口だ。

豚骨スープのカレーなんてね、絶品だよ。カレーのリゾットも、美味しかったな。

あたしの家族は、食べるしが大好き。

お爺も、食べることにお金をかけることは、惜しくないって言つてる。

そのお爺は、グリーンサラダを味塩だけで食べている。

誠は、三杯目のカレーに着手して、スプーンを、規則的に口に運ぶという作業を、続けている。

あたしも、と思ったけど、太り過ぎに要注意と、頭の片隅で、黄信号が点滅したので止めた。

口の中に残る、様々な香りと味に、別れを告げるように、サラダに胡麻ドレをかけた。

「ううそうさま！」

お爺が、茶の間に入つて、NHK 7時のニュースの続きを見る。晚ご飯の時も、付けてるんだけど、食べる方が優先でね。よっぽどの重大ニュースがなければ、テレビには、振り向かないな。

あたしも隣に座つて、一緒に渋茶をすすりながら、ニュースを見るのが日課だ。

これと言つて、あたしにとつての、特ダネはなさそうだ。

クロが入ってきて、あたしの膝の上に乗つた。

気持ちよさそうに、ぐぐるっと、喉を鳴らしている。

おいおい、動こうとしても、動けないじやないか。

足がしごれてきた。

あたしは、クロを抱いたまま、自分の部屋に入つた。

お爺は、本屋さんへ戻り、お婆は、晩ご飯の後片付けをしている。誠は、さつさつと自分の部屋に入つて、宿題に手を付けていく。あたしは、宿題はないんだけど、一応受験生だからね。

少し、勉強でもするかな。

クロはベッドに置いたら、丸くなつて田を瞑つてしまつた。いつでもトイレに行けるよ、ドアは、少し開けてあるんだ。

「なんだよ、クロ。」

クロが、突然、机の上に乗つてきた。

「ミヤ、ミヤ～グロ。」

「何だよ？ 鼻の頭、舐めるなよ。」

あたしの鼻を、舐めてやがる。舐め返してやるぞっ。

「えつ？ 何？ どうしたの？ ……」

目の前に、机の引き出しが見えた。

しかも、でかい。

「ぎゃ～あ～！」

上を向くと、クロが、でかく見える。

「みぐ。おミヤーが、小さくなつたんだよ。おいらが、おつきくなつたんじや一ヤーよ。」

「なつ、なんだ？ クロ。おまえがしゃべつてるのか？ な、なんで、しゃべれるんだ？」

「よく、見一ヤよ。」

「見一ヤつて、何を？ ……んつぎゅ～！ ……」

「つるねこ一ヤ～。」

「猫だ！！！」

あたし、猫になつてる。手が、足が・・・んつ？ 二毛猫だ！

「あばつ？ ぶつ？ ? ? ? ?」

夢だ！ そうに、違ひない。ほつペをつねれば判る。

「つねれな～い！ 爪が、爪がイタ～い！」

「つるねこやつだな。おミヤーは、猫になつたの……。」

「・・・へつ？」

「みくは、見所のある奴だと思ったから、おいらが、猫にしたの。」

「やだつ！ ！ あたし、人間！ ！ ヒト科ヒト属ヒト！ ！」

「心配するなよ。また、ヒトに戻れるから。」

「戻して！ ！」

「やだニヤ。」

「おいつ。クロー。」

「おいらの話を、聞けよ。」

「やだよ～。あたし、猫好きだけど。あたしが人間で、猫が猫だから、
すきなわけで、猫になつたら、猫が好き？ ？ ？ ああ、あたし何考
えてんだ？ ？ ？ ？ あたしのパジャマは？ さつきパジャマに着替えた
はずだよお～～～なんで、あたし、後ろ足で、耳の後ろ搔いてる
んだ？ ？ ？ ？ 違う。後ろ足じやなくって足！ ！ 足？ ええつ？
「うるたえるな、みく！」

「はいっ。」

「つて、返事しちゃつたよお～

「見所のあるみくに、いろんなこと教えてあげるよ。」

「だつてえ。」

「しようがニヤー、な。」

クロが、猫になつたあたしの鼻を舐めた。
戻つた！ あたし、人間です。

「？ ？ ？ 、なんだ、いまのは？」

「ミヤー」

「ミヤーじゃなくつて、しゃべれるだらう、お前？」

「フミヤー」

「だつて、せつき？ ？ ？ ？ ああ？ ？ あたしが、猫だつたか
ら猫、語がわかつたのか？ ？ ええつ？」

「訳が、わからない。」

「ミヤー。ミヤー。」

「ほんとなの？」

「ンシミヤー」

「・・・・・ねえ、クロちゃん。・・・も、いつかいやつて。」

「ミヤオ」

あたし、猫になれる。

おもしろ~い。

クロがね、いろんな所、連れて行つてくれるつて、猫として。

いろんなこと、教えてくれるつて、猫として。

一緒に遊んでくれるつて、猫として。

明日からだつて、言つてた。

あたし、楽しみになつてしまつた、猫として・・・ヒトとして。

猫の集会

* 猫の集会

今日は、学校が終わるのが、待ち遠しかった。

こんなの初めてだよ。誕生日だって、こんな気持ちにならないもん。部活も、そこそこに帰った。涼子と雅美が、ちょっと、むつとした顔をしてたけど、

(帰つてから、猫にならなきやいけないの) つて言つても、絶つて対! に、信じなでしよう。だから、『めん。

「ただいま」

「ああ、おかえり。手、洗つて! うがいしなさい!」

ああ、お婆は、毎日同じことを言つ。

でも、言われないと、何か物足りないから不思議だ。

「みく姉! 何やつてんだよ。」

誠が、もう帰つている。

「何つて……何?」

「何で、制服を鞄に入れてるんだよ。それに、Tシャツ! 反対に着るなよな。」

「えつ! やだ、あたし……そんな」としてな……あれつ……してる。」

「もーっ。何か変なもの、食べてきたんじゃないの?」

「ふつ! 落ち着け! 落ち着くんだ、未来!」

「今度は、何、ぶつぶつ言つてんだ?」

「いや、何でもない。何でもない。」

可愛い弟でも、話せないことはあるんだ。

「ご飯よ~っ!」

六時だ。よしつ、後三時間。クロとの約束は、九時だ。

あつ、クロはどこだ?

「クロ、どこにいる?」

階段を下りながら、そつと、誠に聞いてみた。

「さつき、ソファで寝てたよ。」

「そうか、よかつた。

晩ご飯は、ホッケの干物とけんちん汁に、菜の花のピーナッツ和え。漬け物は、キュウリのぬか漬け。

「さあ、食べるか。」

お爺が、箸をとった。

「いつただつきま～す。」

美味しいんだな、これが。やつぱ、あたし、食べること好きだわ。しばし、猫になることは忘れて、堪能しよう。

ホッケは、どうして、身がこんなにきれいに分かれて、取れるんだろ？

一枚一枚、はがすのが、おもしろいんだよ。

お爺が、くしゃくしゃの顔をした、大福さんみたいになつてる。いくら好きで、美味しいても、そこまで顔を崩すことは、ないと思うのだが。

「みぐ。一いや一やは笑いながら、食べるんじやありません。よだれを、拭きなさい。」

いけねつ、あたしも、お爺のよつになつっていたのか。

「はははっ。でも、美味しいよな、ホッケ。」

誠も、一枚ずつはがしてる。

そうなのだ、たとえ、顔が崩れようと、皿のものは皿い。この皮に、くつつけたところが、ほどよく脂が乗つて・・・とほほほ。

皮もまた、この少しこげたのが、・・・ん～んつ！何とも言えない。

炊きたてのご飯に、ぴったんこ。

あつ、そうそう、けんちん、けんちん、

お婆の、けんちんはね、里芋、ごぼう、人参、大根、蒟蒻、豆腐、油揚げ、ねぎ、それに、薄切りの豚肉が入ってる。

それぞれが、妙にマッチしてるんだな。

味醂が入つて、ちょっと甘めの味付けで、胡麻の油がたらしてある。

里芋が、ほっくりんご。豆腐が、ぐしゃりんご、油揚げ、じゅわりん。蒟蒻、じんにゅう。じょうに、人参・大根。

「みく。お爺さん。そんなに、がつつくんじやありません。」

お爺と、顔を見合わせてしまった。

お~お~、髭に、たさがき! ぼうが、ぶるさがつてゐるぞ。

「みく姉。口の脇に、お豆腐ついてるよ。」

しまつた! あたしもか。

ピーナッツの香りと春の風を、いただき。きぬひらのぬか漬けが、口の中を締めた。

満足、満足。満ち足り、満ち足り。

「い」ちそうさま。」

「みく。ホッケの骨と頭、クロにあげておいて。」

「は~いつ。」

クロは、大体、台所の隅のカーペットの上か、洋間のソファの上で丸くなつてるんだ。

熟睡体勢にはいると、身体を、仰向けにして、真つ直ぐにしてたりもするよ。

「クロ~ツ」

「フミヤア~ツ」

「は~いつ。ホッケだぞ~つ。」

「ホキヤ~」「オ!~」

「おまえも。ホッケ、好きだよなあ。」

「ツキニヤ~ギヨ。」

「よしよし、九時だぞ。」

「オ~ツ~ミヤ。」

さあ、お風呂に入つて、宿題やつりやおう。

「あり、めずらしいね、早くお風呂に入つちやうなんて。」

お婆が、ソファでめがねをかけて、新聞をよんでいた。片付けは終

わったのかな？

「うんつ。きょうは、疲れたから宿題終わつたら、直ぐ寝るね。」

「ああ、そうしなさい。誠にも、早くお風呂に入つて、早く寝なさい。つて、言っておいて。」

「イエスッ。マイ・ボス！」

「センキュー。マイ・ダウターア。」

お婆は、英語が上手いんだ。ジョークも判る。お爺の教育の賜かな、なんちつて。

「誠つ。お風呂早く入つて、早く寝なさいよ。」

「わかった。」

「あたしも、きょう、早く寝るからね。うるさくしないでよ。」

「わかったよ。」

ドア越しの会話で、行動前の、アリバイ工作を完了。本当は、あたし寝ないで、猫になるのはははは、楽しい夜になりそうだ。つて、化け猫じゃないからね。本当の猫に、変身しちゃうんだから。

時計の針は、9時3分前を指している。足音もなく、階下へ降りたあたしは、迷うことなく、台所へと向かつた。

人の気配はない。遠くで、犬の遠吠えが聞こえている。

つこわづきまで、楽しい食事を囲んでいた台所には、まだ、ホッケのにおいが漂っていた。電気の消されたダイニングにて、人の気配はない。

「何してるの？」

「えつ！？・・・み、み、みず。」

「ミミズ？どこに？」

「ちがあうー、水飲んでから寝ようと思ったの。」

「あつ、そう。片付けておいてよ。お婆ちゃんも、寝るから。」

「んつ。わかった。」

ああ、びっくりした。お婆ちゃんったら、音もなく忍び寄つてからに。もおー、サスペンスな動きはやめよつ。

「ミャー、ミャー。」

クロが足元に、やってきた。

抱え上げると、あたしの鼻の頭を舐めた。

「グミヤッ。」

床に、あたしとクロが四つ足で立っている。立っているで、いいのかな。

また、猫になれた。

「どう? みく。心の準備は?」

「大丈夫だよ。・・・あたし、二毛猫だつたんだね。」

「ああ。さあ、行くか。」

クロは、椅子に飛び乗って、調理台までジャンプした。

「・・・」

「なにしてんだ。みく。」

「なについて・・・あたし、そんな高いところまで、ジャンプできな
いよ。」

猫になつてみると、椅子が、やたらと、でかいんだもん。

「何、言つてる。おまえは、猫になつたんだぞ。」

そつ、そつか。あたしは、猫になつてたんだ、思い切つて、一丁や
つてみるか。

「ンツ! - ヌツ! - シヤーッ! - !」

軽い。あたしの身体が、軽い、いつ。

一気に、クロのところまで行つてしまつた。

自分に、拍手しようと思つたら、尻餅をついてしまつた。

「みぐ。前足を一本、同時に上げるなよ。バランス崩すから。まだ、
猫の身体に、馴染んでないんだから、氣をつけな。」

「へへへつ。」

キッチンの窓は、いつも、少しだけ開けてある。

クロが、出入りできるようにしてあるんだ。

そこから、一人で、・・・いや、一匹で飛び降りた。

猫の身体つて、すうによ。バネつてるもん。

指先から肩まで、全部、バネじかけみたい。

「どこ、行くの？」

庭を横切って、フーンスを抜けたところで、聞いてみた。

「集会。」

「集・・・会?」

「ああ、宮本さんちの、隣の空き地でやるから、みんなこ、紹介するよ。」

「はつ?み・ん・な?」

「ああ、この地域の、会長は、寺田さんちのイノスケといつ猫。」

「「フ・ツオ。イノスケ?行司さん?」

「んつ?飼い主さんの付けた名前が、通称になつていて。」

「なるほど。寺田さんつて、大の相撲好きだもんね。わかるわ。」

「おお~い。クロ!」

「やあ、シロにタロー。」これが、例のみくだ。」

「これ?例の?」

「やあ。」

「おつす。」

「や・・・やあ。」

「今夜は、26匹位、集まるよ。」

「そつか。」

空き地までは、150メーター位かなあ。あちこちから、猫がやつてくる。

「集会は、9時20分からだよ。」

シロが鳴いた。じゃなくて、言つた。

「は~い!クロ。」

「・・・やあ。モモ。」

真っ白で、しつぽの長い猫が、クロにすり寄つてきた。

「あつ~」の猫が、みく?」

「あ、あたし?そ・・そ、みくです。」

「けつこう、可愛いじゃん。毛並みもいいみたい。ずっと、猫にな

つちやえば。」

「えつ。ずっと、猫？・・・それも、どうかなと・・・空き地に着いた。いっぱい猫がいる。いろんな猫、ネコ、ねこ。猫だけど、よく見ると、顔も体つきも違う。人間の時は、気がつかないけど、やつぱり違うんだわ。

「んつほん。ペッ！今夜は、集まってくれて、ありがとう。痰を吐いて、しゃべりだした、その雄猫は、見たところのオベラいかな。

「クロ。猫も痰を吐くのか？」

「当たり前だろ。くしゃみもすれば、鼾もかくよ。人間のすることは、いいことも悪いことも、同じようにするよ。」

「ふうんつ。そつかあ・・・」

「黙つて、聞いてなよ。」

「OK。」

「今日の集会の議題は、環境の問題です。皆猫様、どうか、忌憚のない意見を述べ合い、討論していただきたい。」

「げつ？・・・環・境・問・題？ なんだ、それつ？ むつずかしい」。

「・・・みぐ。真面目に考えてくれよな。人間にとつての問題は、俺たち猫や、犬属・鳥属にとつても、大問題なんだから。」

「ん~むつ。それは、もつともな話だ。」

あれつ、腕組みが出来ない。あつ、そつか。あたし猫だ。仕方がない、肉球でも舐めよ。

「んつほん。ああ、その前に。新猫を紹介します。皆さん、仲良くしてやつてください。最初は、誰？・・・えつ・・・あつ、そう。・・ええ、最初は、鈴木さんちのイチロー君。次は、南さんちのサマンサさん。最後に、進藤さんちのみくさん。それでは、紹介者の猫様と一緒に、よろしくお願ひします。」

すつじい、人間の集まりより、しつかりしてるじゃねえか。

「皆猫様。こんばんは。おれは、寺門さんとこのゲンキです。新し

い友達のイチロー君を紹介します。種類は、アメリカン・ショート・ヘアードです。イチロー君は、最近アメリカからやってきたので、まだ、日本の猫言葉が、あまりうまくありません。仲良くなれてください。では、イチロー君、一言お願ひします。

「すっげー。アメリカかよ。英語話すのかな。」「そりや、そうやる。わしゃ、まだ関西弁やからな。」「隣にいた虎猫の、タイガーが言つた。

「ふうんつ。・・・なぜか、納得しちゃうな。」

「Good evening—every cat。」

「わおつ！ イングリッシュユー！」

「アーッ、ワタシユハ イッチロー デッス。ヨロシク、コンバンワ。」

「かつこいなあ、アメリカン・ショート・ヘアーッて。今度、英語、教えてもらおう。」

「そうだな、あいつも、日本語の勉強になるしな。」

「ありがとうございました。次は、サマンサさん。」

「おこんばんは、皆猫様！ あたくしのことば、ご存じよね。南のところの、イメールダざます。こんど、街にストティシユフォールドのミス・サマンサが、来たのでざまあすのよ。ヨーロッパに住んでたんざますが、日本猫語は、お上手でいらっしゃるわ。よろしくね、皆猫様。それじゃ、サマンサ・・・」

「ハーサイ、わたし、サマンサ。」

「・・・へつ？ それだけ？」

「はい、ありがとうございます。では、最後にみくさ。」「おいつ、行こ。」

「恥ずかしいな。アメリカに、ヨーロッパだよ。」

「何言ってんだ、おなじ猫だ。ほりつ、行くぞ。」「えつー、僕は・・・」

「僕だつて、気取つてるクロのやつ。」

「・・・進藤さんちのクロです。みくは、雑種の三毛猫で、田島さ

んとこのサブロウさんと同じで、人間です。」

「えつ？ 雜種？ 人間？ ……ば、ばらしていいのかよ？ ……あたしと同じ人間？ が、いる？ ……」

「僕を、拾ってくれたのが、みくであります。では、みく……」「はつ。・・えつ、え～と・・・みくです。猫になつて一回目ですが、これからも、猫になると思いますので、よろしく。」「んっぽん。ああ。では、環境問題に入ります。」

すごい。たぶん、人間の目から見たら、猫がいっぱいいて、ニヤー二ヤーうるさいと思つてんだろうね

でも、違うんだな。

紹介し合つちゃつたりして、そいでもつて、環境問題だよ。あたしも、思わず聞いつちゃつたりしたの。

「はい。」

黒と白の混ざつた猫が、手を・・・じゃない。右前足を、ちょっと上に上げた。

「ハチさん。何か？」

「ええ。最近の人間社会では、一酸化炭素の排出などで、世界的に環境問題に取り組んでいるようではありますが、・・・京都議定書によれば・・・」

わ～つ、何で知ってるんだ。猫に関係あるのか？

「・・・この問題は、人間に任せるとか、手がないと思います。そこで・・・」

「ちょっと、待つて!」

「はい、ミミさん。」

「わたしも、長いこと猫やつてるけど、人間に任せておくだけじゃ、駄目だと思いますよ。」

「しかし、一酸化炭素の問題は・・・」

「それって、ただ、一酸化炭素だけの問題じゃないと思つんだけど。」

「んっぽん。では、何が問題だと。」

「人間は、第6の感覚も、自然予知能力も失せてるから、自分で考えずに、他の人間の話を信じるところがあるわよね。」

「はあ、・・・それで？」

「二酸化炭素、二酸化炭素つて言つていれば、人間は、みんな信じて、排ガス規制だ。森林保護だ。と言つてるけど、もつと、宇宙的規模で何かが起こってるってことに、気づいてないのよ。」

「宇宙的？・・・それは、どうじう・・・」

ハチさんが、小首を傾げた。

「いまの猫は、人間と一緒にで、感覚が鈍つてきてるからねえ。」

「失礼な。人間と一緒にしないでもらいたいな。」

ハチさんが、毛を逆立てた。

「落ち着いて、聞いてちょうだい。」

ミミさんは、ハチさんを制して、続けた。

あたしは、もう、びっくりしどうしよ。

だって、あたしより知識ありそただしい。眞面目なんだもん、みんな。

「あのね、地球温暖化現象が、二酸化炭素のせいだけだと、思う？」

「・・・・・」

「確かに、そのせいもあるわよね。だけど、太陽熱や太陽風、磁場や地熱の変化、それにともなう、海流の変化があるわ。エル一一二ヨなんて昔つからあるわよ。いまさら、騒ぎ立てても、どうかしてるわ。人間の排出する二酸化炭素は、多いけど。一つの要因にしかなつてないとと思うわ。」

「んつ。つほん。つまり、どういうことかな？」

「つまり、わたしたち動物には、どうしようもない要因があるってことよ。」

「俺たちには、何も出来ねえってことか？」

丸々と太った、アビシニアンが、尻尾を振りながら、ぶすっと言った。

おいおい、アビシニアンが太つたら、格好悪いよう。

「・・・出来ないわね。神様だけが知ってる」とよ。

「また、神様か？」

どの猫か判らないが、後ろの方で声がした。

猫にも神様がいるのかな？

「何億万年も、いや、それ以前に、神に造られた宇宙は、存在してるのよ。わたしたちの寿命なんて、十五年か、せいぜい二十一年ですよ。ちっぽけなものよ。地球だって小さいわ。その小さな地球上に、小さな変化が起こっても、不思議じゃないし、当然よ。神様が、もういらない。と思えば、いつでも潰せるわよ。わたしも、時々、知らずにありんこ潰しちゃうけど。そんなものなのよ。小さすぎて、二酸化炭素が、原因だ。と言つていれば、そうだそうだと、納得して、パニックにならなくて済むわよね。洗脳して、その方向に向かっちゃうの。だって、しょうがないわ。人間が出来るのは、それぐらいのもの。」

「・・・・・」

「・・・・・」

静かになってしまった。

そりやそうだ。

出来ないことは、出来ない。どうしていいか皆猫、判らないのだろう。

もちろん！ あたしも判らないが、考えさせられてしまったよう。だってさ、確かに、お偉いさんとか、学者が言つたことは、信じやすいものね。

隠された秘密を守るために、学者さん達が、利用されてるかもしないでしょ。

「・・・あんっぽん。ええ。・・・とにかくだな、ああ。その議論はまたにして、いま現実的な問題だな、ええつゝ青年団の団長ー。」

「はい。」

クロが、首を持ち上げて返事した。

ええつ？ 青年団？ ・・・ 団長？ ・・・ クロが？ ・・・ 若いのに？

あたしは、今、猫の世界に入ってるんだぞ。

集会だつて不思議なのに、青年団の団長もありかよ？

「クロ君。何があるかね？」

「はい。先日、一晩かけて見て回ったんですが、・・・」

帰つてこなかつた夜のことだ、きっと。

「斎藤さんちのところにある集積所が、ゴミの仕分けに手間取つて、収集車が、長い間停まつてゐるため、渋滞を起こしてます。」

そうそう。あそこつて、いつも汚いんだ。

「そうなんだ。あそここの排ガスが、一番ひどい。あれをなんとかしないきや、この辺の二酸化炭素は、増えるばかりなんだ。」

ハチさんが、三歩前に出てみんなの顔を見渡した。

「そうね。廻りの小さな事から始めましょう。」

///さんが、同調した。

「はい。そうですね。角を曲がつた、小林さんのところも同じような状態です。どうも、その近所の、田中さんと市村さん、それに、田向さんところが、仕分けをしないで、ゴミを混ぜて袋に入れてるようなんです。」

クロが、説明した。

「んつほん。なるほど。それで、何か、対策は見つかつたかね？」

「まだ、決まってはいないんですけど、犬の青年団長と話をしまして、・・・」

ええっ？ 犬の青年団？ ・・・ 犬のお巡りさんなら、聞いたことがあるけど？

ということは、犬にも、人間の犬がいたりなんかしちゃつて。あるある、絶対に。

「この地区の犬と猫で、協力して何とかしよう」ということにには、なつたのですが。犬の会長さんが・・・」

犬の会長？ ふむつ、いるよな当然。青年団長が、いるんだから。あたしは、もう驚かないことに決めた。

婦人会も青少年育成の会も、絶対あるに違いない。あたしだつて、

学級副委員長だ。

「んつほん。田中さんちのブルが、会長だつたな。」

「ええ、無造作にゴミを出してる当家の、飼われ主が原因では・・・

「飼われ主？ そうだ、驚かないんだつた、あたし。

「そつちが、何とかなれば、犬と猫の青年団で、超属派の、地球ゴミ化対策会議を開こうという事になりました。そこで、人間指導要綱を作り、ゴミをきちんと仕分けして出させて、渋滞を無くし、ひいては、二酸化炭素の削減にもなるかと・・・わずかではあります

が。」

「ふむつほん。ブル会長は、私のほうで何とかしよう。クロ君は、引き続き、犬の青年団と意見交換をするよ!」。

「はい。」

「それでは、時間も10時を過ぎましたので、終わりにします。次回は、回覧泣きで、通知します。」

回覧泣き？ 時々、あちこちで猫の鳴き声がするのは、回覧板なのか？

「さあ、帰るか？」

「うんつ・・・」

「どうした、みく?」

「んつ。・・んんつ、あたし考えさせられたわ。二酸化炭素。」

「そうか。」

「それにねえ、クロ。・・・田島さんとのサブロウつて人間なの？」

「ああ、でも、元人間つて言つた方がいいかな。」

「元？」

「うんつ。人間に戻るつもりはないみたいだよ。」

「げええつ！？！？」

「ありかよ、そんなこと。」

「全国では、結構いるよ。」

「全国？・・・日本全部つてこと？」

「ああ、去年の統計だと一万人以上だよ。行方不明の人間つているだろう？あれの半分は、人間が嫌で、猫や犬になつてるよ。」

「・・・・・」

「犬にもなれるんだ。行方不明の人つて、今、猫やつてるのか。何だかすごいよね。」

でも、その気持ちも判ると思わない。

「猫社会も、これでなかなか大変なんだぞ。」

「そう・・・みたいね。」

話しながら・・いや、鳴きながらかな、歩いていて、家の庭に、いつの間にか着いてしまった。

あたしつたらね。猫みたいにジャンプしたりしてるので。

あつ、猫やつてるんだっけ、今。

「みく。お前も猫の素質があるから、どうだ、猫になっちゃつたら。

「ええーっ！勘弁してくれよ。まだ、人間でやりたいこといつぱいあるんだからあ。時々だけでいいよ。猫になるのは。」

「そうか。・・・別に、毛を逆立てなくていいんだよ。」

「えつ？」

「本当だ。背中の毛が逆立つてゐる。

あした学校へ行くとき、髪の毛、逆立つてないだらうなあ。

「でもさあ。クロガいないと猫になつたり、人間に戻つたり出来ないんだろう？」

「いや、今度、ねこなりをあげるよ。」

「？・・・何だ。ねこなりつて？」

「うん。ねこになるから、ねこなり。」

「犬は、いぬなり。か？」

「犬が、なんて言つてるか知らないけど、犬にあるよ。でも、選ばれた人間だけだ。」

「なるほど。」

「みく、誰かに話しても構わないよ。どうせ、誰も信じないから。」

そりや そうだ。

(あたし 猫になれるんだ)

なんて 話した日に やあ、病院送りになるかも しれないでしょ。

「まあ、きょうのところは、そういうことで・・・」

クロが そう 言つて、猫になつてゐるあたしの 鼻を 舐めた。

戻つた。

台所で、人間に 戻つた。

* 神様

翌日、転校生がやつてきた。

篠原里沙。

髪が長くて、色が白くて、足が細くて、一重まぶたで・・・はあ。美しさでは、完璧にあたしは負けた。

北海道から来たらしい。

「進藤、お前が今日一日、いろいろ教えてやつてくれ。」

といつ、担任の後藤先生の一言で、雑用係の仕事があたしに回ってきた。

後藤先生は、体育の先生でサッカーの顧問をしている。

なかなかの良い男で、良い先生なんだよ。

良い先生ってのは、指導力がどうの、といつのではなく、友達感覚で付き合える先生、という意味だよ。

まあ、良い先生の指示には、従わねばならないであろう。

朝から、里沙のお守り役だ。

だがこいつ、意外に好感の持てる女子生徒だった。

普通わあ、きれいなやつって生意気だつたり、澄ましてたりするでしょう。

でも里沙は、そんなところがないみたい。

けつこう、おしゃべりするし、笑うときは、男子を気にせずに大口を開けたりしちゃって。

この先、付き合つていけるかもね。

お昼休みになった。

雅美と涼子、それに里沙とあたしの四人で、中庭の芝生へ出た。

あたしは、お婆手作りのお弁当、里沙もね、お弁当。

自分で作つたんだつてよ。

雅美と涼子は、きょうも口ロッケパンと牛乳。

「わあっ、おいしそう。」

涼子が、里沙のお弁当を覗いて、言った。

「どれどれ。」

あたしも覗いた。

ミートボールが入つてゐる、それにサラダ。

アルミの仕切りの隣には、がんもどきの煮たのと、漬け物が入つてた。

ご飯の入つたパックを開けると、ふりかけの掛かつたご飯が、少なめに詰められている。

あたしのお弁当はつと・・・鶏の唐揚げだ。

それに、青梗菜とベーコンと玉子の、バター炒めが添えられている。ご飯の上には、梅干しと漬け物。

「あんたは、いつも美味しそうだよね。」

と、雅美が、あたしのお弁当を覗きながら、里沙のミートボールを一つ摘んで、口に入れた。

「おっ、旨いじゃん。」

「へへへっ。あたし、料理好きなんだ。」

「好きでも、なかなか上手く作れないよ。」

「みく。みくも料理上手なんだから、今度一人で作つて食べさせてよ。」

涼子の提案。

「んつ。暇があつたらね。いいでしょ里沙？日曜日でもいい。ピクニック。」

「うんつ、いいわよ。でも、日曜日は教会へ行くから、夕方だつたら〇〇。」

「教会？」

三人一緒に言つて、里沙の顔を見てしまつた。

「あたし、クリスチヤンだもん。」

「へへつ、そう。家族みんなそつなの？」

雅美が、インタビューを開始した。

「一つ頂戴。」

涼子が、あたしの唐揚げを取つた。

「あ～んつ、一番でかいやつだったのにい。」

「いただき。」

「んつ。それで？」

雅美の、インタビューは続行中。

それによると、家族構成は両親と、兄と姉が一人ずついて、クリスチャンは、里沙とお兄ちゃんの祐太朗だけだという。

お父さんは、筑波研究学園都市にある、農業環境技術研究所の、研究技師みたいだ。

北海道の農環研から転勤で来たんだって。

生まれは横浜で、東京・筑波・北海道、そしてまた、筑波に戻ってきたのだという。

「大変だな、引っ越しばかりで。」

「そうね。でも慣れたわ。はははっ。石岡には、小学校に入る前までいたのよ。」

「そうなの？」

「うんっ。お母さんの実家なの。そこからお父さんは、筑波まで通つてる。」

「部活は、やらないのか？」

「うん、・・・やりたいはあるけど、どうせ夏休みままでしょ。あとは、お受験勉強。」

「それもそうだな。」

「ねえ、雅美は、何か信じてるの？」
「宗教つてこと？」

「ん～つ、宗教と言えば、宗教かな。
「ないよ。」

「じゃ、神様は信じてないの？」

「んつ～つと。・・・だつて分かんないもん。いるかいないか。」

（そういえば、昨夜、クロと一緒に猫の集会に行つたとき、ミミさ

んだつたかな。神様つて言つてたよな。)

あたしは、雅美と里沙の会話を聞いていて思い出した。

(神様か？・・・本当にいるのかな？)

「 いるわよ。 」

あたしの頭の疑問に答えるかのよつて、里沙は、雅美に答えていた。

「 見たのかよ？ 里沙は。 」

「 姿を見たり、声を聞いた訳じやないわ。でも、後で気がつくのよ。あれは神様だつたて。 」

「 何かに、化けてるのか？ 」

「 神様は、何処にでもいる。何にでもなれる。風でも木でも、犬でも猫でも。 」

(猫？)

「 ふうんつ。 」

「 今度、一緒に教会へ行こうよ。その後に、料理を作つて食べる。 」

「 んうんつ。暇があつたらな。 」

雅美は、いるかいなかわからぬものに、興味がわいてきたようだ。

「 ああ、美味しかつた。 」

涼子は、食べることに集中していたようだ。

あまり、人の話を聞いてないんだから、もうつ。

無事に、何事もなく六時間まで終わつた。

里沙も、すぐに溶け込んで、あたしの出番はあまりなかつた。でもね、廊下を歩いてたりすると、男子がみんな振り返るんだよ。きれいだからしようがないけど、少しジエラシーフ、てどこかな。授業中もね、普段うるさい奴が、里沙の眼を氣にして、真面目になつちやつたりしてゐから、おかしかつたよ。

放課後は、陸上の中距離を見学してた。

雅美と仲良くなつたからつてわけじやなくつて、やっぱり、陸上やつてたみたい。

北海道マラソンの、20キロの部にも参加したんだつてよ。

帰りは、里沙も途中まで一緒に。

家は、国府町で国道沿いにあるんだって。

家に帰つたあたしは、クロに、ただいまを言った。

クロつたら、テラスの椅子で丸くなつて寝てるだけなんだから。猫になつた仲なのに、お帰りぐらい、言つてもいいと思わない?ねえ。

まあ仕方ない、いまは、あたしは人間様だ。

「おかえりっ」

お婆が、クロの代わりに返事をした。

「宿題あるんだつたら、やつちやいな。」

「えつ、うん。今何時だろ?」

「まだ、6時前よ。」

「そうか、きょうは、少し早かつたかな。誠は?」

「勉強してるよ。来週テストなんだって。」「ふうんっ。」

あたしは、一階に上がつて、誠の部屋をノックした。

「お~い、誠。テストなんだつて?」

「ああ、みく姉。おかえり。そつなんだ、五教科だけだけどね。」

言いながら、ドアを開けて顔を覗かせた。

「今日の晩ご飯、なんだろう?」

「わかんないよ。あたし。いま、帰つたとこだもん。」

「そつかあ、なんだか腹減っちゃつた。」

「お前は、いつも腹へつてんの。」

誠のおでこをつついて、部屋に入つた。

宿題は、あたしの嫌いな歴史。

鎌倉時代の出来事と年号だ。

あたしは、今、青春時代で、鎌倉時代もなまくら時代も、関係ないつてえのよね、んつ本当に!」

あ、仕方ない。やるかっ。

着替えたあたしは、机に向かつたが、今ひとつ集中できない。

(神様か?)

里沙の言った神様と、猫の////たちの言った神様と、同じなのかな
あ、なんて考えてたりして。
いふと思う? 神様。

猫の集会？

* 猫の集会？

家と学校で、平凡な日が続いて一週間が過ぎた。
あたしにとつては、平凡でもなかつたけどね。
何しろ、猫になつちゃつたんだから。一回も。

全然、平凡じやないよね。驚き桃の木、山椒の木だよ。
まつ、とにかく人間としての、普段の生活はそのまんま。
美味しいお婆の料理を食べて、学校へ行つて、時々やつてくる、疑
問さんとお話をし、部活をして帰つてくる毎日。
あつ、そつそつ里沙がね、陸上部の中長距離に入ったの。
夏休みの前の、短い期間だけど、やつぱり、身体も動かしたいつて
勉強も、まあまあかな。

歴史に関しては、あたしより出来るわね。
年号なんかもしっかり覚えてるし、教科書に載つてないことも結構
知つてる。

お父さんが、好きみたいね、歴史。農業の研究者なのに。
あたしも、お爺が本やさんなんだから、少し、歴史関係の本でも、
読めばいいのよね。

でも、年号がねえ。

その日、クロが100m1位の瓶を咥えて、あたしの部屋へやつて
きた。

「おう、クロ。・・・何だそれ？」
「ミヤオニヤリー」
「あつ、ねこなりか？」
「ミコンニヤー」
「そうかそうか。」
(?変だな・・鳴いてるクロの言葉が、わかるような気がする。
ねこなりは、100m1位の、茶色の瓶に入つてる。)

小さな瓶を付けた、ネックレスが一緒に、怪しい薬のようだ。
仕様書には、4～5滴を、ネックレスの小さな瓶に入れて持ち歩く
と書いてある。

匂いをかぐか、ちょっと舐めれば、猫にならしく。

子供の手の届かないところに、保管。

摂氏35度以上の場所には、保管厳禁。

目的以外には、使用禁止。

お肌が荒れたり、かゆくなつたら、使用をお止め下さい。

だって。何なんだよ。

何で、日本語で、細かく書いてあるのかは、深く、考えないことに
した。

「ありがと、クロ！」

「フンニヤー、ギヤーフゴオ。」

「何？・・・集会か？」

「ニヤン！」

「何時？」

「ニヤイン？」

「ナイン？・・9時か？OK！・・・台所で会おう。」

「ミヤ、ミヤーグロ。」

夜が、楽しみだ。

それにもしても、年号を覚えるのは苦手だな、やっぱり。

語呂合わせで覚えるのは、歴史の大変な事柄を、馬鹿にしてるような気がしたりして、嫌だ・・・なんて言い訳したりして。
それよりも、晩ご飯何だろう。

「みぐ。居るのか？」

お爺だ。

「いるよお。」

ドアを開けると、お爺が、何冊かの本を持って入ってきた。

「この本、お前にあげるよ。」

「何の本？」

「うんっ。お前、いつも歴史が駄目だつて言つてるからな。歴史の本だ。」

「えつ・歴史?」

「はははっ。歴史というか、時代物の小説だよ。」

「ああ、それなら好きだわ。」

「山岡荘八の書いた伊達政宗シリーズだった。」

「伊達政宗つて、豊臣の前だっけ?」

「前じゃなくて、後かな?・・・まあ、おもしろいから読んでみな。」

「うんっ。ありがと。・・・あつ、お爺。晩ご飯何かな?」

「何だろな?・・・でも、「コーンスープの匂いはしたな。」

「コーンスープ。じゃ、ハンバーグだな。」

「ははっ。たぶんな。」

お爺が下へ降りてから、宿題を片づけた。

予想通り、晩ご飯はハンバーグだった。

人參とブロッコリーの入った、煮込みハンバーグ。チーズが、とろり蕩けて、毛布のように被さっている。

サラダは、レタス多めのグリーンサラダ。

もちろん、漬け物有りだ。

この煮込みのソースは、何だか知らないけど、旨いんだよ。デミグラスのようなトマトのよう。ハンバーグも柔らかい。

あのね、お婆はね、カレーと同じで、ハンバーグの料理も、いっぱいレパートリーを持つているんだ。

普通に、ドミグラで作るのから、フレッシュトマトソース、照り焼き、大根おろし、チーズ有り、ベーコン有り、きのこ有りとさまざままだ。

今日は、煮込み。

熱々が、じゅうとして、とうつとして、はあーあ、う・ま・い! サラダのアスパラが、ハンバーグのソースで、飽和状態になつた、口の中を洗ってくれる。

晩ご飯と、学校が休みの時の食事は、本当に至極の時なんだな。
ありがたいね。料理の上手い、お婆と一緒に。

時間をきちんと守って、食事をするのも、美味しい食べる、秘訣かもしれないね。

だって、その時間になるとね、ちゃんと脳から、胃袋や舌に刺激が伝わるんだよ。

良くできてるよ、人間の身体は。お婆は、それを計算してるんだな、きっと。

お爺は、NHK七時のニュースの続きを、誠と一緒に見ている。
あたしは、お風呂に入った。

約束の9時になった。

早いよね、時間の過ぎるのって。
待ち合わせ通りに、台所へ来た。
もちろん、ねこなりは首に掛けてるよ。

「ニヤツ。」

クロが小首を傾げて、あたしを見た。

あたしは首に掛けた小瓶から、猫なりの匂いを少しかいだ。
なつちやつたよ、猫に。

ねこなり。すごいな。

ひょっとしたら、あすなろも、檜になれるのかもしね。あすなり、って言ってね。

「みく。きょうは、犬の青年団長が来るよ。」

「はつ？ 犬の青年団長？ ・ ・ ・ 犬のおまわりさんってのは、聞いたことがあるんだけど ・ ・ ・

「おまわりさんじゃなくて、青年団長。この前のゴミの件で、意見を聞くんだ。まあ大体は、おいらと決めてあるんだけど ・ ・ ・ 会長さんが、問題なんだよ。」

「犬の会長さん？」

「そう。田中さんのブルさん。」

空き地に行くと、この前よりも多くの人数・・じゃない猫数が集まつ

ていた。

犬も、三匹いる。

「んつほん。会長のイノスケです。」

始まつたぞ。

「先日の、『ミミの件で、犬の青年団長のタローさんにきてもらつてます。不肖、私も犬の会長さんに話したのですが、なかなか・・・。』

「アウオーン！」

タローさんが、一声吠えた。

「では、タローさんお願ひします。」

長い舌を出しながら、前に立つた、じゃなくて前に座つた。前足を、きちんと揃えている。

「タローです。」

猫の言葉か？

「動物の言葉は、みんなわかるよ。それぞれに、訛りがあるけどね。」

クロが言つた。

犬訛りに、鳥訛りか？おもしろいなあ。たぬき訛り、モモンガア訛り、あるある。

「先日ワン、クロさんと、地球『ミミ化対策会議を開き、話をしたワソ。』

ワンが、訛りかな。

「ですが、犬の団長さんがあまりいい返事をしないワン。」

「フギヤーゴ！」

ミミさんが、毛を少し逆立てた。

「人間や、わたしたちに出来ることだけでも、やらなければならぬいのよ。神様だけに頼つちや駄目よ。何とかなるじゃなくつて、何とかしーヤきや！

「ねえ、クロ。あのミミさんはクリスチャンだつたりして？」

「うんつ。神様を信じじてるよ。」

「にやつぱり！」

「みく。お前は信じてないのか？神様。」

「えつ、・・・よく判らないな、神様つて。」

「ふうん。まあその話は、また後で。」

タローさんが、話を再開した。

「ミミさんの言つことは判りますワン。犬と猫の青年団でやることワン、『ミミの収集場所で、仕分けのされてないゴミ袋ワン、破つて、ゴミをかちちらかして仕分けをする。あとは、人間がそれを改めて掃除をして、仕分けると言うわけですワン。」

やつぱり、ワンが訛りだ。そうに、違いない。

「それは、いいかもしねニヤイざますわね。」

イメルダさんが、右前足の毛を舐めながら、言った。

「デモ、ニヤンゲンニ オイカツケラレマッス。」

すげえ、イチローさん、日本語勉強してるわ。

「そう。問題は、人間ですワン。自分の後始末が出来ないのに、我々のすることは、ただ、ゴミをあせつてるとしか思わないですからネン。」

ネン？ワンと違つ訛りか？

「んつほん！で、どうします？」

「人間に、追いかけられる確率の高い朝ワン、犬がやりますワン、猫の皆様には、夜活動してもらいたいのですワン。」

「フニャーんつほん。どうですか？青年団長のクロさん。」

おっ、クロの出番だ。

「はい。猫の青年団は、それで結構ですが、・・・犬の団長さんが・・・」

「それについてワン、昨夜、犬の青年団を中心に、勇士を集めましてクーデターを起こすことに決めましたワン。」

「ニヤー！？」

「フニャギヤー！」

集会場が、ざわつきだした。

そりや そうだよね、クーデターだもんね。話がでかいぞ。

「んつほん。お静かに！・・・ タローさん、クーデターとは穢やかではないですか。」

「はあ、会長さんのブルは、田中さんの飼われ主ですワンが、以前から、生肉の賄賂を食わされてるという、噂がありましてワン、それで、他の犬を静かにさせたり、田中さんの廻りにワン、近づけなかつたり、つるさい犬にはかみついて、傷を負わせたりしてたわけですワン。」

「んつほん。ほづ・・・ それで、猫が近づいても吠えたわけだ。」

「そうですワン。ブルの側近ワン、四匹の副会長と会計なんですが・

・・・

会計？もいるのか。学校の生徒会みたいだワン。いけねえ。訛りがうつった。

「・・・ 生肉の分け前に、あずかつてますワンワン。いままでも、犬社会のために働いてないワンと、批判が上がっていました。そこで、会計のゴンを捕まえて、尋問したらワン、白状したのですワン。ワン。」

「 昨夜の、キャインキャインといつのはそれなのね。」

ミリさんが言った。

「 そうですワン。我々勇士ワン、十一匹ありますワン。明日、五月十五日の夜十時に、集会をする予定ですワンが、そこで決起しますワン。」

「 ウォンツー ラオーンツー・

タローさんの側に付いていた二匹の犬が、かつゝよく吠えた。

犬の五・一五事件だ。

「 そのあとにワン、選挙で会長を決めて、ゴンの件を提案して了承してもらいますワン。」

「 成功するれますか？」

今度は、左前足の毛を舐めながら、イメルダが言った。

「 成功させますワン！準備ワン、万端ですワン。」

「

自信たっぷりに、タローはきつぱりと、犬訛りで言った。

「明日の夜十時以降ワン、戒厳令を敷いて、我々の仲間が、この辺の警備につきますワンので、猫族の皆様にワン、外出を控えていただくよう、要請しますワン。」

「あたくし、あした『デート』だつたのよ。」

イメリダが、口を突き出して言った。

その側で、イチローが、ぽつと耳をを赤く染めた。ははあ、あの一人出来てるな。見なかつた振りをして、肉球を舐めた。

「夜中の十二時までにワン、カタをつけますワン。」

かつこいいじやん、タロー。

「んつほん。どうですかな皆猫さん?」

反対の声は、上がらない。

「では、そういうことで決定します。明後日の夜、再度集まつてください。以上!」

「すごいね、クロ。」

「ああ、でも、犬族の世界ではよくあることだよ。」

「そうなの?」

「うんつ。タローさんも、神を信じてるから大丈夫だつ。」

「クリスチャン?」

「人間の世界では、クリスチャンと言うのかな。神様はいるよ。それを、信じてるだけだ。」

「クロ。お前も?」

「ああ。」

集会が終わつて、話をしながら帰つた。

「神は、一つだけだ。」

「一つ?・・・猫じゃないの?」

「神だよ。猫でも人でもない。それを造つたんだからもつと、偉大だな。」

「人は、偉大じゃないのかな?」

「何処が、偉大なんだ？」

「んつ～むむつ。そう言われると、返事が出来ないな。猫の集会の方が、人間よりしつかりしてるかも。」

「そりゃそうだ。生死が関わってるからな。人間は、欲得で動くからな。」

「ふうん。でもブルだつて・・・」

「うんつ。たまに、猫でも犬でも、人間に可愛がられすぎて、甘やかされるとそうなつてしまふんだ。」

「甘えか？・・・」

「神を信じて、間違つた道を歩かなければ、穏やかに死を迎えられるよ。」

「死・・・ねえ～？」

「この世に産まれてきて、判つてることは、誰猫でも死ぬということだ。それは、人間でも、木でも草でも同じだ。」

「間違つた生き方をすれば、死ぬときに苦しんで、死んでからも、ずっと苦しい。正しい生き方をすれば、死んだ後も生きているんだ。」

「はつ？どいうこつちや？」

「みくも、いろいろ学べば、判るはずだよ。」

猫の鈴のように、ぶら下がつている、ねこなりネックレスの匂いを、ちょっと嗅いで人間に戻つた。

不思議な気持ちだ。

だつて皆猫に皆犬、真面目なんだもん。考えさせられちゃうわよね、人間として。

神様ついているのかな？

居るとしたら、どこで何をしてるの？

今度、猫になつたとき、もつとクロに聞いてみよ。もう、いつでもどこでも猫になれるんだ、あたし。

犬の五・一五事件

* 犬の五・一五事件

五月十五日の夜が来た。

「何、だか騒々しいわね。」

お婆が、台所でお茶をすすつていた。

「そうね。」

あたしも、クロと一緒に、水を飲みに降りてきたのだが、お婆と一緒に、お茶を飲むことにした。

「フミヤー」

クロは、心配そうな顔をあたしに向けてから。自分の席について、水を舐め始また。

「いつもは、こんなにうるさくないのに、どうしたのかしら。」

お婆は犬の吠える声が、気になるようだ。

「そうだね。この辺の犬は、いつもおとなしいよね。」

あたしは、話を合わせた。

だつて、犬がクーデター起こしてるなんて、言えないでしょう。

「ウツー、ワン、ウラン…ウワン…！」

「家の庭まで、入ってきたみたいよ。」

「そうだね。」

あたしは、落ち着いた振りをして、渋茶をすすつた。

「ウツ、ミヤー」

クロが、あたしの膝に乗つて、鼻をこすりつけてきた。

心配なんだろうね。だつてさ、クロが言い出したゴミの問題が、犬のクーデターになっちゃつたんだから。

心配はもつともなことだ。うんつ。

「クロは、あんたに、よくなついてるねえ。」

お婆が、あたしとクロが、眼と眼で話をしているのを見ていつた。

「・・・えつ？・・・そつだね。」

「何だか、兄弟みたい。」

(どきつー)

「ええ～っ、それってお婆、あたしが猫つてこと?」

「その反対よ。クロが、人間みたい。」

はあ～っ。あたしつたら、何ドキドキしてんだらう。

「胸にぶら下げるの、なあ～に?」

(どきつー・どきづきつーー)

「えつ? ははは、こ、これ? 友達に、もらつたんだわ。」

「ふ～ん。中に何が入ってるの?」

お婆の手が、ねこなりのベンダントに伸びてきた。

「だだだ、だつ、だめよ。」

「へつ、どうして?」

「・・・・」、これはね、これは、他の人が触ると、効力がなくなつちゃうんだつて。」

「何の?」

「え～っと、お守りなのよ。健康とか学問とか」

「まあ～、みくは、そんなこと信じてるの?」

「いつ?・・・・」

お婆は、迷信とかお守りとか、信じてないんだつけ。

「とつ、友達がくれたから、大事にしようかな、なんて思っちゃつてたりして。へへへつ。」

「ワ、ワララオオーン!」

「あら、また、うるさくなつたわ。」

お婆は、立つて窓から、外の様子を見た。

まいつたなあ。あたしだつて、お守りなんか、信じちゃいないけど、言い訳は、むずかしい。

「また、庭に入つてきて、追いかけっこしてるわ。」

クーデター、失敗かな。たしか、五・一・五事件は、失敗だつたよな。田中さんちのブルは、強そうだしな。成功すればいいけど、タローだつて、実権を握ればどうなるか判らないしな。

(クーデターか・・・)

「えつ? 何か言つた・・・クーデ・・・?」

「えつ、あつ、いや、そのクー・・クー・・・食つ、食ひべきか食わざるべきか?」

「はつ?」

「少し、お腹すいたな。なんてね・・・」

「・・・きょう、少しおかしいわね、みく。」

「べつ?・・・れ、歴史が少し・・難しくってね。」

「ふうん。来年は受験だしね。そのお守り、効き日があればいいけどね。」

ふうつ、冷や汗たらりんたらりん。

「何だか、うるせえな。」

誠が、下りてきた。

「勉強してたのに、集中できないよ。何かあったのかな?」

(クーデターよ。)

「ミコー・ヤーニヤン」

「ヒツ? 何だつてクロ?」

「ほほほつ。誠つたら、クロの言つてることが判るの?」

お婆が、笑つて言つた。

「いや、判ればいいけどね。なあ、お姉。」

「そうだね。」

クーデターつて言つたのよ。

「フミヤ。」

「なあ~に。水が飲みたいの?」

あたし、人間のままなのに、猫の言葉がわかるようになつてきた。

「ミツ、ミヤミヤーン。」

ふうん。誠が、落ち着きを取り戻したようだ。

「誠。クロ、水飲みたいみたい。」

「オーケー! ねえ、お姉。あした、理科の植物のことを教えて。」

「ああ、いいよ。」

クロに水をあげてから、誠は、また二階へ上がつていった。

「台所、きれいにしておいてね。」

お婆も、自分の部屋へ戻つた。

お爺は、疲れたのか、七時のニュースを見た後、鼾をかいて寝ている。

「ワツ！ワウオーンンツー！」

「終わつたニヤン。」

クロが、首を上げて言った。

やつぱり、猫の言葉がわかる。

「そうか。つで、どうなつたの？」

「タローさん達が、成功したみたいだ。」

「うんつ。」

「今夜は、まだ、警戒してゐるから、あしたの夜九時に会議を開いて、そのあと報告するつてさ。いま、庭でタローさんが言つてた。」

確かに、誰犬か知らないが、庭で吠えてた。

クーデター成功

* クーデター成功

翌々日の夜十時、猫になつたあたしとクロは、いつもの場所で、猫の会議に参加した。

犬のタローが、数匹の犬と一緒に参加していた。タローは、鼻の頭に傷を作っていた。他の犬も、耳が裂けていたり、びっこを、引いていたりしている。

「すっげえ～なあ～。」

「結構、時間掛かったみたいだね。」

クロつたら、案外、平然としてるんだよ。おとといの夜は、時々、びくつとしてうるさかつたのにね。

あたしだって、怖かつたもの。

だつてさ、歯が鋭いもん。

「怖かつたよな。クロ。」

「うんつ。・・・だけど、人間の方が、もつと怖いよ。」

「えつ？」

「あつ。そうか。みく、お前人間だっけ？」

「へつ？ そうだよう。お前のご主人様でしょ。」

「でも、ネコの方が、似合つてるよ。」

「んつほんつ。では、早速タローさんに報告を。」

タローが、皆猫の前に出てきた。

「クーデターは、成功しました。」

格好いい。言うことも簡潔。

「それで、後は、どうなるぞますの？」

「ブルは、引退ですワン。新しい会長さんには、路川さんちに、トシゾウさん。会計には、佐藤さんちのミチコさんが成りますワン。わたしも、青年団長を降りて、ここにいる、サブローが後を引き継ぎます。」

「えつ？ タローも辞めるの？」

「あなたは、今回のヒーローさまですから、留まるべきでありますわよ。」

「フミヤー」

「ニヨゴー」

「ニヤンミヤン」

皆猫、あたしと同じ考え方だ。

「わたしワン・・・」

タローが、話しだした。

「・・・クーデターを成功させましたワン。だから、一線からしおきます。私欲でやつたわけでワンなく、犬猫属のために、鳥や人間のためにやつたわけで、あとは、長老犬に任せます。わたしは、青年団のほうも引退して、サブローに譲りますワン。わたしが、中央に残ると、余計な誤解を招くことにもなりますワン。それに、いろいろ勉強したいこともあって・・・」

格好いいなあ。本当に。タローは、犬や猫、それに対し人間の違いについて、調べたいんだって。

青年団も、六ヶ月から一年以内の犬が団員なんだってさ。

「クロ。お前は、猫の青年団長だろ？ まだ、子供だと思つてたけど・

・・

「猫は、最初の一年で、大人になつてしまつよ。犬もそうだよ。猫生は短い。」

「何だ？ 猫生つて。」

「人間は、人生だろ？ 猫は猫生。犬は犬生だ。」

「なるほど。牛は、牛生。魚は、魚生か。」

「うんっ。そうなるかな。人間だけだよ。いつまでも、おっぱい飲んで、親にべたべたしてるのは。」

「うつ～ん。考えちゃうな。」

「はい。んつほん！ では、青年団長のクロ君。」

「おいつ。お前だよ。クロ。会長が呼んでる。」

「わかった。」

クロが、今後の方針を、皆猫の前で説明し始ました。

立派なもんだ。考え方うつよね。

だつてさ、あたしつたら、お爺やお婆に甘えてばかりだもん。もう、十五年も人間やってるのにね。

クロは、まだ、一年未満だよ。

猫の寿命が20年で、人間の寿命が百年だとしたら……でも、クロは、まだ五歳ぐらいだ。

はあ～。何て情けないんだ。あたしは。

「・・・ということで、協力していきたいと思います。」

はっ。クロのスピーチが終わつた。大事なこと聞いてなかつたみたい、あたし。

「では、きょうの集会は、これで終わります。」

「フミヤー。」

「ワラオーン。」

集会の終わった後、猫と犬の青年団で、地球ゴミ化対策会議があつた。

あたしも、ちょっと、お邪魔した。一人で帰るの怖いもん。

クロと犬のタローが、考えてたことを実行するらしい。新しい犬の青年団長サブローもやる気まんまん。

仕分けをしてない、「ゴミの袋だけを選んで、破つて仕分けをするん

だつてよ。斎藤さんちのとこの集積所と。他二箇所。

夜は、猫属。朝は、犬属。最後の仕上げは、人属。考えてるよね。

猫と犬が、仕分けされずに出された、「ゴミの袋を破つて、ビニールやら生ゴミやらに、散らかすんだつてさ。

その後に、清掃車でやって来たヒト科・ヒト属・ヒトが、仕分けして片づけるのだ。

元もと、ヒトが出した「ゴミだからしじうがないけどね。

たぶん、ヒトは怒るよね。（猫や犬が散らかした。）と言つてね。

この集会に、ヒトの代表も来ればいいのよ。

そうすれば、猫や犬の考えが解るわよね。ヒトよりも偉いつて。

絶対、猫たちの方が偉いわよ。

あたしも、その偉い猫の一人・・・じゃない、一猫なんだから。

そう。あたし猫なのよ。なんか、猫になつてヒトを見る眼が変わつたわ。

クロと家まで帰る途中は、少し憂鬱な気分だった。

人間とは（パート？）

* 人間とは（パート1）

あまり疲れぬ夜を過ごした翌日は、頭が重い。

「早くしなさい。」

お婆の声が、耳から入って、睡眠を司る脳神経を揺さぶる。

「はい。」

「お姉。なんだか眠そうだね。」

「んつ。なんだかじやなくて、とても。」

「顔洗つたのか？・・田やにがついてるよ。右の眼。」

「えつ？・・やだつ、もづ。・・・も一回、顔洗うか。先行つてて。」

「顔の洗い直しで、少し、脳細胞がむくむくと起きたよ。」

「おはよう。」

「ああ、食べなさい。」

食卓の上に田をやると、脳細胞の八割が田を覚ましたみたい。納豆がある。アスパラガスのおひたしがある。さんまの柔らかな味醤干しがある。

そして、きゅうりと大根のぬか漬けに、わかめのみそ汁が、並んでるんだよ。

そりやあ、田が覚めるわな。食べる事が好きで良かつたな、あ・た・し。

でも、何でだらうね。お婆は、あたし達の好きなもの知ってるんだろ？。

だつてや、朝でも夜でも、ほとんど、残したことがないんだよ。分量も、ちゃんと判つてるんだから、すこいよね。

残飯の出ない家庭つて、あたしん家ぐらいいじやないの。ねえ。誠は、納豆に玉子の黄身を混ぜ込んで、ご飯の上にかけている。あたしは、納豆には、多めの刻み葱と、多めのからしを入れて、こ

れ以上、糸は引かないぞといつまで、おはしで、かき混ぜすぐるぐらいかき混せて、ほつかほつかの「ご飯にかけて食べるのが好きなんだ。

「ご飯は、絶対にほつかほつかでなきゃダメ！納豆と一緒に口入れると、この飯が舌に触れて、やけどしそうなぐらいがいい。それが、また納豆の味を引き立てちゃうのだ。

その熱々ご飯が、お婆の手からあたしの手にバトンされた。納豆は、すでに糸の中につづくまつて、準備万端だ。

「あはははは。皿こ！」

「なんです。女の子が、皿こだなんて。」

「だつて、これは女、美味しいじゃなくって、皿こでしょ。」

「同じじゃないの？」

誠が、納豆のねばねばを、みそ汁で洗うよりしながら囁いて言つた。

「ちがうつー絶対にちがう。」

「えつー。どう、違うんだよ？」

「・・・それはだな、・・・納豆は、皿こ。・・・カレーは、美味しい。」

「い。といふことだな。」

「何だ、それ？・・・じやつ、オムレツは？」

「美味しい。」

「ラーメンは？」

「皿こ。」

「おそばは？」

「美味しい。」

「うどんは？」

「皿こ。」

「焼きそば。」

「皿こ。」

「スペゲティ。」

「皿こ。」

「お刺身。」

「美味しい。」

「・・・? なんか、判つてきたような気がする。」

「どうう? そこなくっちゃ、あたしの弟なんだから。」

「漬け物は、旨いで、おひたしは、美味しいだろ?」

「んむふむつ、いいところをついてるな。」

「馬鹿なこと言つてないで、食べちゃいなさい。遅れるわよ。」

お婆は、この手の話は、苦手らしい。

「は〜い。」

朝、顔を二回洗つたせいかな。家を出るのが少し遅くなつた。

「遅いぞ、みく!」

雅美に、肩をこづかれてしまつた。涼子と里沙もいる。

「ごめん。ごめん。皆様おそろいで。」

「何が、おそろいだよ。遅刻したら、あなたのせい」

顔を二回洗つて、誠と美味しいか旨いかの討論会を開いてた。とい
うのは言い訳にならないだろうな。

「きょう、ホームルームがあるよね。」

里沙が言つた。

「あつ! 忘れてた・・・」

あたしが進行司会役だつた。

「議題は、ルールよね。」

里沙が追い打ちを掛けってきた。

「・・・そりだつたね。」

いつもは、隆太が進行するのだが、隆太はきょう提案事項を発表す
ることになっている。提案事項と言つても、学校側にとつての良い
生徒の隆太のことだ。生徒側にとつて良い提案事項になるかどうか、
判らない。

前にもあつたんだよ。そつゆうことが。
その時は、清掃のことだったんだ。

隆太の提案というのは、学校の廻り、つまりフェンスで囲まれた外

側。そこまで清掃しようとうものだった。

(おおつ、なんとボランティア精神の豊かなこと。)

あたしは、そう思った。もちろん、ひ・に・く!!

(学校の受け狙ってるだけじゃん!)

雅美の顔は、そう言っていた。

(時間が足りないよ。帰るのが遅くなる。)

涼子の顔は、確かにそう言っていた。

結局、ボツになつたけどね。

当たり前だわな。人数とか時間とか範囲とか、何も考えてねえくん
だもん。ホウキの数だって、足りやあしねえ。
そうゆう人つて、居ない?

けつこういるよね。受けねらい。

「ルールって、規則でしょ? 規則増やして欲しくないわあ。」

涼子が言つた。

「でも、人間社会には規則は必要よね。学校にだって。」

里沙が、優等生的言葉を述べた。

「縛られるのは、やだよな。」

「違犯したら、どうするの?」

雅美と涼子は、ぶつぶつと小言を並べている。

(ああー、憂鬱!)

だって、進行係は、中立公平でなければならないんだ。あたしにだ

つて、意見はあるし文句も言いたい。嫌いだ。進行役。

それにしても、なんで人間つてめんどくさいんだろ。

人間とは（パート？）

* 人間とは（パート？）

とうとうホームルームの時間がやつてきてしまった。

時間割の変更がないかなと思いながら過ごした一日は長かった。

そうゆう時つてあるでしょ。

絶対にやつてきてほしくないけど、絶対にやつてくるのがわかつて
るとき。

やだよね。

そればつかり考えて、過ごす時間がもつたいないよ。考えたくない
ても、いやな事つて頭に絶対に引っかかるもんね。

やらなければならないことも、それを超えなければならないことも、
わかってるんだけど・・・あーあつ・・憂鬱。

今日一日、あたしはなんて無駄な時間を、過ごしてしまったんだろう。

ホームルームなんて、大した事ないだろ。さつさと片付けちまいな。

あたしは自分に言い聞かせて、教壇に立つた。

担任の後藤先生は、窓際に椅子を持つていて、かすかに微笑を浮
かべながら教室中を眺め回している。

「それでは、ホームルール始めます。」

あたしは椅子に座り、クラスメイトの顔を見回して一呼吸おいてか
ら言った。

「今日の議題は、ルールです。意見のある人、提案のある人は挙手
を願います。」

あたしの右隣には委員長の隆太。左には書記の直子が黒縁のめがね
を鼻にかけて、緊張して鉛筆を握っている。

直子は、人前に出ると注目されていなくとも、緊張するタイプなの
だ。でも、書記としての能力は、ピカイチ。誰もが認める才能を持
つている。

授業中のノートなんてす”いよ。他の人の倍は書いてるね。

それもきれいにまとめて。ノートを執りに学校へ来てるみたい。

テストの前なんか、直子の前に行列が出来てノートを借りるんだ。

その責任感みたいなものもあるのかもしれないな。

だつて本人の成績は、クラスの中ぐらいだもん。

性格は、真面目とゆうか、優柔不斷の堅物つてとこかな。

「はい！」

ほらきたつ。

いつも、必ずといっていいほど、真っ先に手を上げる真治だ。

川崎真治。成績も運動能力もまづまづ。だが、常に反抗精神が表に現れている。

決して暴力的ではないが、頭も悪くないだけに弁が立つ。ときどき、論旨に矛盾があることに気づかないけどね。

「川崎君。」

「あの～。ルールって規則でしょ。生徒手帳にこまごまと書いてあるやつ。あれさ、全部読んだことあるやついるのかな。・・・おれは、呼んでねえけど・・・」

「だから、学生服のボタンはずしてるのか・・・」

仁科が、ちよつかいを出した。

「・・・つるせいよ！あれを読んで、守ればいいだけだろ。変なのがあれば、全校生徒会にかけばいい。」

「お前、呼んで守れんのかよ？」

また、仁科がちよつかいを出した。

「だから、守れねえような規則は、生徒会で検討するんだよ。」「規則は、破るためにある。」

誰かが言った。

後藤先生は、ニタニタと笑っている。

「発言は、手を挙げてからにしてください。」

あたしは、一応注意をした。

「いま、川崎君の意見に対しても何がありますか？」

「はいっ」

ほりきたつ。

鈴木亜紀。いわゆるつっぱり。成績は上。真剣に授業を聞いてると
は思えないんだけど（あたしもだけど、へへつ）、学年で十位には
いつも顔を出している。

姉御肌で、学校側に対しても反抗的な言動をする。

もちろん、学校側にべたつく生徒も大嫌いだ。なぜか、あたしとは気が合つ。

「鈴木さん。」

「川崎君の意見は、もっともだわ。・・あたしも読んでいないし、
学ランのボタンをはずしては駄目だと、スカートの丈を長くした
り、短くしたりとか書いてないじやん。・・先生！・・先生は読
んでますか？」

「んっ？ 僕が・・目を通した程度で、読んだとは言えないな。
足を組んだまま、後藤先生は言った。

これが、この先生のいいところだ。嘘はつかない。いい先生になろうとはしない。

「先生が、これでもんじょうがねえよ。」

ちよつかいの仁科が、口を出した。

「先生は呼んでなくともいいんだよ・・・」

亜紀が続けた。

「・・・だつて、生徒じゃないんだから。ただ、生徒を監督する立
場として、内容ぐらいは、知つておいてほしいなと思つて、あたし
は質問したんだ。誰も改めて読もうとしないのは、常識のことし
か書いてないからだらう。川崎の言つこと、わかるよあたし。生徒
の立場と現実を見計らつて、検討すべきかもしねり。」
そうかもしれないと思った。

「他に何か？」

教室を眺め回すと、机に落書きをしてるやつ、勝手なおしゃべりをしてるやつ、何の参考書か知らないが、読んでるやつ。半分以上は、

聞いてねえ！

あたしは、なんと言つてもこれが嫌いなのだ。リーダーシップがないと言えば、それまでだが、あたしだって、意見や文句のひとつも言いたいのを我慢してだな、まとめようとしてるのに。むかつく。

「平さん！参考書なんか読んでないで、生徒手帳でも読んだら！」
「相川君！エロ話もいいかけんにして、規則の話に耳を傾けたらどう！」

えつ？ちょっとやだ・・・あたし、本当に頭にきてるみたい。みんなが、あたしを見ている。後藤先生まで。

「んつほん・・委員長。お願ひします。」

隆太のやつ、まだポカンと口を開けてあたしを見る。

そうだろうな。今まで、あたし切れたことあんまりないもんな。猫の集会で、猫や犬の真面目さに感化されたかも。

右ひじで突いてやると、隆太は立ち上がった、

「えつ、えーと・・・川崎君や鈴木さんの意見は、もつともだと思います。そこで、ひとつ提案があるのですが・・・」

そこまで言つて、隆太は右から左へみんなの顔を見渡した。
さつきのあたしの怒りがまだ尾を引いているのか、みんな隆太を見ている。

いや、半分はあたしを見てるかな。

「提案というのは、生徒手帳にある規則にのつとつて、毎朝、検査をするのはどうでしょ？」

「なんだよ、それ！」

「プライベートの侵害だよ。」

「誰がやるんだよ。」

「ふざけんな！」

「馬鹿か、お前は？」

「時間の無駄遣い！」

騒然！！

先生は、知つてて知らんふり。

「静かに！！」

あたしは、立ち上がつて大きな声を出した。

さつきのが効いているのか、すぐに静かになった。

あたしは、委員長に向かつていった。

「委員長。いまみんなからプライベートの侵害、時間の無駄遣い、誰がやる、何を検査する、何のためにという声が上がつていましたが、提案するからには、それなりの理由や実施するための方針、いつから実施するのか、クラスだけか学校全体か、リスクやメリットも考えていると思いますので、お答えください。」

一同拍手。

隆太は、あたしの顔を怖いものでも見るよつて、大きく目を見開いて見ている。

「答えるよ！」

仁科の声に、立ち上がつた隆太は、じどりもどりだつた。
当たり前だ。大して考えてないんだから。ただ、こうゆう提案をすれば、先生に受けがいいかな程度にしか考えてない。

隆太は、素直でいいやつなんだけど、ときどきむかつくんだよなあ。みんなの質問にも、規則は守らなければいけないと、学校は勉強するためにあり、公共の場でプライベートの侵害にはならないとか、お互いが規則を守ればよりよい学校生活が出来るなどなど、よく出来ました的発言をした。

みんな、うざつたい顔して聞いていた。

「先生。」

あたしは、先生に尋ねた。

「この生徒手帳の規則は、いつ作られたのですか？」

「んつ？・・戦後の教育法改正のときに作られて、何度かの改正があり、最後の改正は、確か昭和52年じゃなかつたかな・・・生徒手帳に書いてあるぞ。」

「つまり、20年も前の改正ということですね。」

「そつなるな。」

「委員長。提案を続けてください。」

後藤先生は、ニヤツと笑った。

それを見て、亜紀が声を出さずに笑った。

あたしは、イラつく心を抑えるのに必死だった。
だつて、そうでしょう。

クロだつて、犬のタローだつて、ちゃんと下調べして賛同者やその他の意見をきいてから、提案したり行動したりしてるので。しつかりとした考え方あつてのことなのよ。

（あ～、なんて人間は馬鹿なんだろう。）

「どうした？ 委員長。・・なんか言えよ。」

「・・・・・。」

隆太は、立つたまま言葉が出てこない。

あたしの顔を見たつてしまふ。一度、猫の集会に連れて行つてやりたいわ。んつ當に。

「委員長の言いたいことは、こ「つゆう」とだと思います。」

あたしは、立ち上がりつて続けた。

「規則とは何かということです。生徒手帳に書いてあつても、しみじみ読んだことのある人は、いないと思います。あたしも読んだことがないし、学校側からも読みなさいという指導は、なかつたと思ひます。・・・じゃ、なぜ生徒手帳に、規則が書いてあるのか？それも、20年も前のやつが。社会には、たくさんの規則があります。法律もそのひとつですし、免許を取るのにも、交通規則を学ばなければなりません。いや、自然の中にも、動物社会にも、理科で習つたように、法則や規則があります。それは、人間と違つてきちんと守られています。守られない動物は、死ぬしかないでしょ。生きていいくつえで、正しい規則だからです。自然が作った、規則だからです。あしたちの規則は、人間が作ったものです。正しいものもあれば、誰が考へても、おかしいものもあります。自然の上に成り立つた規則じやないから。でも、人間として守らねばならない規則

も、当然あるでしょ。その上で、中学生としても。・・・委員長は、今の規則を守りながら、改めて規則を見直してみようと、言いたいのだと思います。明らかにおかしい規則は改善し、付け加えてもいい規則は、付け加える。学校側やPTAに、お願いする規則も、出てくるかもしませんよね。人間として、決して不公平ではない規則。中学生として、当たり前の規則を考えてみませんか？

ちょっとの間、教室が静かになった。

窓から心地よい風が吹いて、あたしの心を大きくした。

隆太が、あたしの顔を見て拍手をしている。

「そういうことなのか？委員長！」

仁科が、隆太に質問。

「・・・そつ、そういうことです。はいっ！」

「だつたら、最初からそう言えよ！」

「そうだよ、規則を守つて検査するなんて言えば反発するのは、当つたり前だろうが。」

「未来に、助けてもらつてんじゃねえよ。」

「はははっ。まあまあ。先生もな、正直言つて、この規則が妥当かどうかわからない。学校側としても、特に厳格に守らせてるわけでもない。しかし、親の中には厳しいことを言つ人もいるし、周りの人たちの中にも、中学生の癖にとか言つ人もいる。俺は、正直言つてそんな言葉を聽くと、おもしろくない。大人が規則を守つてから文句を言え。と言いたくなる・・・」

「そうだそうだ。」

「その通りだ。」

「・・実際は、言えないけどな。先生も立場があるからな。どうだ？まだ35分の時間がある。生徒手帳の規則にこだわらずに、みんなで考えてみるのもいいんじゃないか？」

後藤先生は、あたしのほうへ顔を振った。

あたしは言った。

「35分しかありません。その時間で話し合える議題でもないと思

いますが、次のホームルームへ引き継いでも、価値はあると思います。時間を節約する意味でも、5人づつのグループに分かれて、25分間話し合つてください。その後、各グループに発表してもらいます。」

あたしと委員長、書記もそれぞれのグループに入つて、討論を始めた。

思つていたよりも、みんな真剣な顔をしている。

少しは、猫らしくなつたみたいだ。

後藤先生は、ふつと笑つて、校庭に顔を向けて一年生のサッカーの授業を見ている。

人間つて、大人も子供もどうしようもない動物なのかも知れない。

人間とは（パート？）

* 人間とは（パート？）

ホームルームが終わって、下校の時間になった。

あたしは、何かが心にひつかったまま、帰り支度をした。きょうは、部活はない。ソフトボール部だけが、夏の予選が近いので特訓をしていた。

「きょうの未来、なんか迫力あつたわね。」

雅美が、割と静かに言った。

「んつ。久しぶりに真剣だつたみたい。」

涼子も同調する。

「・・・なにかね、真剣になっちゃつたわ。あたし。」

「神様の仕業かもね。」里沙が、微笑んだ。

「神様？」

あたしたち三人は、立ち止まって里沙の顔を見た。

一步先んじた里沙が、振り返つて

「そうよ。神様がみんなに考えさせたくつて、未来に言わせたのよ。」

と、さわやかな笑顔を見せた。

「神様つてキリスト？」

涼子が聞いた。

「キリストは神様の子供よ。」

「あたしん家にもよく来るよ。なんか小さな雑誌を持つてさ。結構しつこいのもいたりして。」

雅美が言った。

「宗教のひとつだよね。」

あたしは、誰に言つともなく言った。

「宗教といえば宗教ね。でも、あたしは宗教だとかには、こだわつてないの。だって、神様は、一人だもの。」

クロと同じようなことを言つてゐる。

「一人ということは、人間なのか？」

「神様よ。一人という言葉を使つたけど、唯一の存在つてこと。」

「ゆ・い・い・つ？」

「そうよ。ゆいいつ！」

「あたしだつて、あたしだけよ。」

「あたしは、言つた。」

「そうなのよ。未来は未来だけ。あなただけなの。他のものにはな
れないわ。」

（・・・あたし、時々ネコになっちゃう・・・）

「だから、大事にしなきやいけないのよ。」

「なにを大事にするんだ？」

雅美が、口を尖らせながら言つた。

「自分をよ。」

「・・・じゃ、神様は関係ないじやん。」

「神様に近づくの。神は完全だから、あたしたちも見習つて完全に
近くなればいいのよ。人間には、とてもむずかしいけど、心に留め
て生きていくことは出来るわ。」

（たしかに・・・人間にはむずかしい。ネコやイヌの方が真剣だ。）

「それって、理想を追いかけるのと違う?」

涼子が、つぶやくように言つた。

「理想かもしれない。・・・でも、理想を求めるのは悪いことじや
ないわ。」

「おいつ！未来。」

歩道橋の階段に座つていた、女子中学生が声をかけてきた。

「なんだつ。亜紀じやないか・・・どうしたの？」

「ああ。今日のホームルームが気になつてな。ちょっと、お前と話
がしたくて。」

「うんつ。いいよ。」

「別に、どうつてことじやないけど・・・規則なんてあつてないよ

うなもんだし・・・そりや、なけりや困ることも多いわけだけど・・・なんか、来年受験だと思うと憂鬱になつてな。受験の制度だって規則といえるだろ。」

「そうだね。・・・考えてみれば、規則だらけかもしないな。亜紀は、ツツパリだけど、見る目は確かなものを持つてるんだ。回りがツツパリと思ってるだけで、本人はそう思っていないし、どこか不思議な魅力が、あつたりするんだ。

「亜紀ちゃん。」

涼子が、歩道橋を上りながら亜紀を見た。

「何だ？」

「あんた、神様信じる?」

「神様？・・・んつー。いるかもしれないな・・・いや、いたほうがいいな。お化けは、いねえだらうけど、神様は、いてもいい。いると信じれば、いいんだな・・・きっと。」

「宗教を信じるのは、弱い人間だろ?」

雅美が、また口を尖らせて言った。

「そつか？・・何が弱いんだ？体か？頭か？」

雅美と亜紀は、あまり仲がよくない。

「なにか欠点というか、心に傷を持つてるといつか・・・」

「そんなものはア、誰でも持つてる！・・お前だけが持つてないのか？他の人間を弱いと言えるのか？決め付けることも出来ないし、決め付けられることも出来ない。弱いといえばみんな弱いし、強いといえばみんな強いとも言えるんじゃねえのか？」

「そりや、そただけど・・・」

雅美の口が、さらに尖った。

「人間だけだろ？そちやつて自分のことはどうでも、他のやつの事を気にするのは・・・」

(そうだ。ネコはもつと賢いぞ。ネコ科ネコ属のことを考えてる。)

「あたし、おなかすいた・・・」

涼子の足取りが重くなつた。

「 そ う い え ば 、 そ う だ な 。 」

雅美が、同調した。口の尖がりは、すこし納まつたようだ。

「 未 来 つ 。 今 度 の 土 曜 日 遊 び に 行 つ て い い か ? 」

亜紀が、あたしの顔を見て言つた。

「 あ た シ も ・ ・ 」

「 あ あ 、 あ た シ も ・ ・ 」

結局、四人とも来ることになった。

亜紀の言つてる事は、間違つてないと思う。

自分のことしか、考えてないやつ多いもんね。大人も子供も。ヒト科ヒト属ヒトは厄介な動物だ。人間つて何なんだろう。

あたしも、おなかすいた。

お婆は、今夜何を作るんだろ。楽しみで、口の中をよだれ達がはしゃぎ始まつた。

家族

* 家族

「腹減った～！」

「何ですか？腹減ったなんて・・・おなかがすいたでしょ。」

「だって、おなかがすいたじゃ、ピンとこないんだよね。」

誠が、台所に入ってきてお婆に叱られた。

「はははっ。誠の言つことすりじくわかる。」

「なんです未来まで。」

「へへへっ。だって、おなかがすいただと、おやつを食べる感覚で、ごはんをたくさん食べる感覺じゃないもん。」

「そうそう。未来姉の言つとおり！」

「英語だと、アイム、ハングリーで終わっちゃうの」と、日本語は、難しいわ。」

「はいはいっ。・・・さあ、そこ片付けて『飯にしましょ』。」

「待つてました。」

誠は、忙しくテーブルの上を片付けて、お箸やお茶碗を並べ始めた。クロは、もう食べたらしく、テーブルの下で丸くなつてワインクを送ってきた。

(あとで、ネコにならうぜ。)

といつてるみたい。

あたしもワインク返しをした。

お爺が、帰ってきた。

時間でかえつてくるのか、において帰つてくるのかわからないけど、きつと、時間が体にしみ込んでいるんだろうな。

六十年以上、何時間心臓を動かしているんだろう？。驚異的不思議だ。

「・・・んつ？ 何か顔についてるか？」

「えつ？ いやべつに・・・」

お爺に、驚異的不思議の観察を見られてしまった。

「はい、どうぞー。」

お婆が、独特の微笑みとともに、メインディッシュをお爺の前に置いた。

お爺の口元が、ちょっとだらしなくならんだと、あたしは見逃さなかつた。

「おおつ、肉団子だ。」

「違うよ、お爺。ミートボールだよ。」

「くつ。英語と日本語の違いだけじゃないか・・・」

「違うよ。肉団子は中華とかあんかけとか、それに揚げ肉団子。肉

団子入り野菜炒めもあるな。」

「・・・・・じや、これは何だ。」

「えつ。・・・・これは、ミートボールシチュー？・・テミグラスミー

ートボール？・・・煮込みミートボールだ。」

「煮込みミートボールじや、英語と日本語が混ぜこぜだな。」

「いいんだよ、それで。一緒に入れて煮込んだから、混ざっちゃつたんだ。」

「はははっ、そつか。・・・まあ、皿けりやなんでもいいがな。」

「それも違う、お爺。これは、皿けりやなくて美味しいだ。」

一口、ご飯を口に入れてから、あたしは、お爺に言った。

「ほう、旨いと美味しいとは、違うのか？」

「うん、違う。これは、美味しい。」

(ふんっ)と鼻で返事をしてから、お爺はミートボールをひとつ箸で持ち上げて、口に入れた。

「んっ。・・・美味しいな。・・・そつか、しょうゆ系が皿こで、

ソース系が美味しいかな？・・・」

「はははっ、いい線言つてるよ、お爺。」

誠が、呟わせた。

「そつか。チーズが美味しいで、豆腐は皿い。サラダが美味しいで、漬物は、旨い。」

・・・あれっ？カタカナとひらがなか？クッキーは美味しいで、かりんとうは、旨いかな・・・

「ははっ。お爺、わかつてゐるじゃん。でも、かりんとうなんて、いま売つてないでしょ。」

「そうか、あまり見かけないな。それじゃ、甘納豆に直しておいてくれ。」

「おじいさんまで、馬鹿な」と言つてないで、・・・早く食べちゃいなさい。」

お爺は、肩をすくめてあたしとまことを見た。

お爺のセンスは、どつちかつて言つとあたしと誠に似ている。いや、あたしたちが、似ているのか。

まつ、それはそれとして今夜のメニューだ。

旨いか美味しいか、問題になつた代物は、ミートボールを煮込んだものだ。

何で煮込んだかつて？

それは、お婆に訊かなきやわからないけど、自分のレシピには、こだわりを持つていて、孫のあたしにも、詳しく教えてくれないんだ。えーとね。煮込みのソースの中には、トマトと玉ねぎ。

それから、（あはっ、美味しい）人参も入つてゐるし、セロリとんにくの匂いもするな。

んつ、バターとチーズも加えてあるなきつと。

蕩けるチーズが、乗つてるんだけど、ソースの中のチーズは、何だろう。チーズつていっぱい種類あるもんね。

いろんな香辛料も入つてゐるみたいだな。揚げたジャガイモと玉ねぎも入つてゐる。

ミートボールは、ハンバーグと同じ材料だと思つけど、ハンバーグより柔らかく、揚げてないけどジューシーで、ほのかに甘みも伝わつてくる。（美味しいアゲイン）

ご飯は、バーライス。にんにくの香りが少しして、刻みパセリが飾つてあるんだ。

家庭料理なのに、こいつてるよね。

サラダは、多めのサニーレタスに、きゅうりを薄く輪切りにして混ぜて、ホワイトアスパラと、刻んだトマトが乗っている。

きょうのドレッシングは、オニオンドレッシング。

もちろん、お婆のお手製だよ。

そうそう、我が家にはね、お婆お手製のドレッシングが、常時キープしてあるんだ。

きょうの、おろした玉ねぎと、オリーブオイルと、お酢をメインにしたやつのほかに、じま油と、しょうゆと、お酢と、砂糖のやつ。すつて練つた「ごまと、お酢とお砂糖のやつ。

マヨネーズとフレッシュコミルクベースのやつ。

これに、わさびを溶かしたやつの6種類は、必ず置いてあるんだ。その他、マスターを入れたのとか、ケチャップを使つたりとか、そのときの料理で簡単に作つてしまふのだよ。

何をメインで作つてるかは、大体わかるんだけど、その配合の割合だと、香辛料で違つてくるよね。それが、難しい。

お婆のうでは、す「ご」とい。

スープは、オニオンスープ。じげ茶色をしていて、玉ねぎだなんて、わからない。

チキンスープストックに、これでもかと、形がなくなるまで炒めつけた玉ねぎを入れ、ワインだか料理酒だかを入れてある。

下品に思われがちな玉ねぎが、上品な一夜を過ごすのだ。

あれつ。全部、玉ねぎ料理じゃねえか。（再び、美味しいアゲイン）

もちろん、漬物付き。

なぜか、きゅうりのぬか漬けが、妙なハーモニーを奏でて、きょうの晩御飯とのコンサートを楽しんでいる。

「あ～つ。美味しかった。」

「んつ。美味しかったな。」

いつものように、沈黙の至高のひと時を過ぐした誠とお爺は、旨いではなく（美味しい）を連発している。

お婆は、その言葉に田をきりひと光らせて応え、不敵な笑みをたためてうなずいていた。

怒つていっても、寂しくても、何かの壁にぶちあたつても、食事の後は、暖かでりながらも、リフレッシュさせてくれる心地よい空気が、漂つてくる。

不思議だ。

なんかわからないけど（よつしー）とこいつ気持ちがわいくてくるんだよな。

これが、まざい食事だとそりゃいかいでしょ。

それがわかつていて作ってるとしたら・・・・。

やっぱり、あのお婆は只者じやない。

お爺も誠もあたしも、お婆の腕を信じてるから食事が楽しみで、気持ちよくて満足するんだよな。

もし、まざい物が出てきたらお婆の信頼は、吹っ飛んでしまつだらう。

きつい商売をしてるなお婆も。

一回の食事で、信頼関係がくずれるとは思わないけど・・・そんなものかもしれないとも思うし・・・

何ていうのかな、家族がみんなで食事をするって、いいよね。

一日の24時間のうちで、食事で顔を合わせるのは1時間もないのにね。

いつも、一緒にいるよつな。時々、顔を合わせたくないこともあるけど・・・

一緒に、食べる楽しみを共有しているといつか。わかるでしょ？

そのひと時を演出すために、頑張ってるお婆。

小さなことでも、大事に考え方とするお婆に、敬意を表して感謝。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9480o/>

私の猫はクリスチャン

2011年10月8日06時47分発行